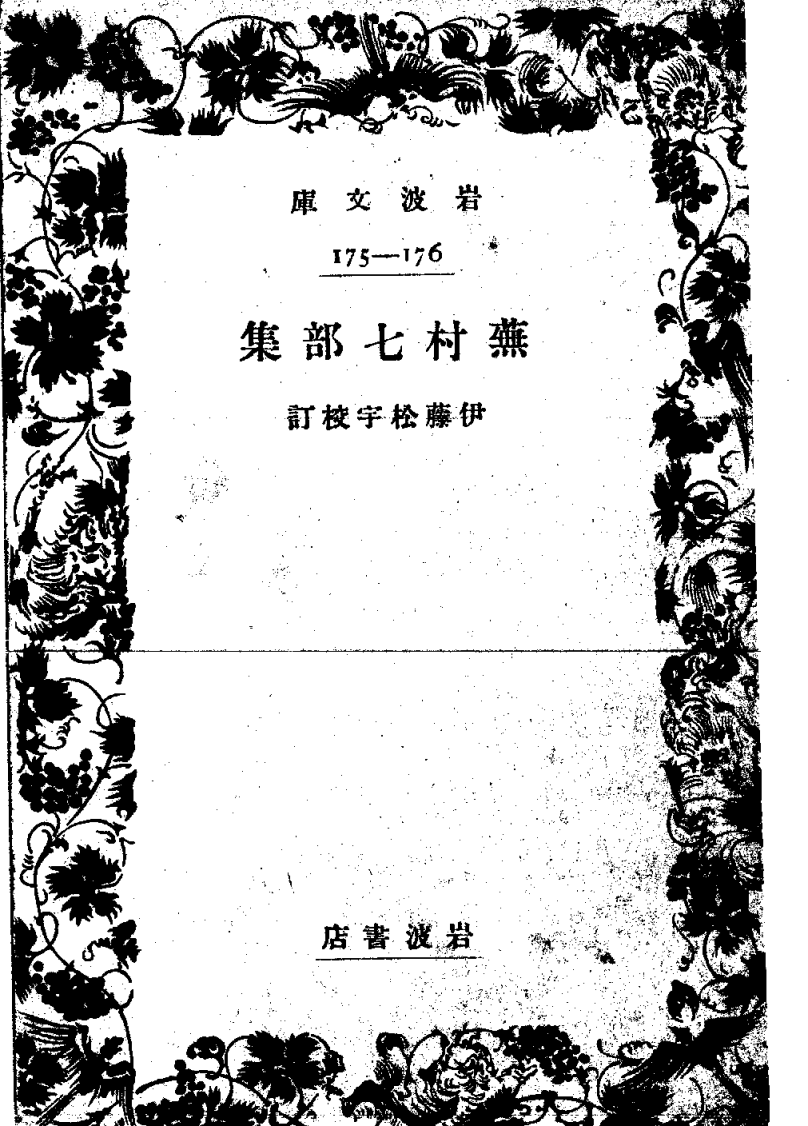




庫 文 波 岩

175—176

集 部 七 村 蕪

訂 校 字 松 藤 伊

店 書 波 岩

庫 文 波 岩

196—197

集 部 七 村 燕

訂校字松藤伊



店 書 波 岩

## 例言

蕪村七部集は文化五年秋書肆懷玉堂等の編纂せるものにして例の七部集形本二卷に分たる、上卷には其雪影、明鳥、一夜四驗、花鳥篇、桃李、下卷には續明鳥、續一夜四驗、五車反古の各篇を収む、七部集と云へるも實は八部集なり。その各篇に就て解説すれば左の如くである。

其雪影は、几圭の十三回忌に孝子几董が、父の遺作及び諸家の寄稿を乞うて編めるもの、連句及び一派の俳句を収め、蕪村の序嘯山の跋及び蕪村の筆に成れる芭蕉、其角、嵐雪、巴人、几圭等五子の像あり、其雪影の原本には右の他几董の序文及び卷頭に几董、几圭、爲拾、斗洲、牙川等の百韻、几董の獨吟歌仙等あり、七部集本には之を削除せるも、本書には原本より之を補入したり。挿畫の内原本には芭蕉、其角、嵐雪の三子の像を一枚に収めあるも、七部集は原本より小型なる爲めか之を三枚に解體して收録せり、本書は七部集よりも更に小型なり、挿畫は七部集本に依る事としたり。明和九年刊、一卷。

明鳥は西海の行脚より歸れる馬南が流行の新知見を語れば、几董も「余が方寸に察るに違す」と、大いに古今を論じたるはて、巻きたる兩吟歌仙を卷頭に、一派の連句及び俳句を収め、蕪村の校閱を受け且つ明鳥の題名を指示されしもの、校訂者未だ明鳥原本を寓目する能はず、暫く七部集本に依る事とせり、安永二年刊、一卷。

一夜四吟は蕪村、樗良、几董、嵐山の歌仙四巻を収めたるもの、蕪村の序に嵐山の語を援て「いかで四吟流行のおかしきには」云々とあり、當時の消息を窺ふべきなり、巻頭の句により「このほとり一夜四歌仙」として刊行せるものに依れり、安永二年刊、一卷。

花鳥篇は其の名の示せる如く、櫻花の俳句及び連句、宗因の時鳥の句に蕪村一派の人々が繼句したる歌仙等を収め、蕪村の序及び挿畫あり、七部集本は挿畫の前に連吟十二句を脱せるも、本書には原本により之を補ひたり、天明二年刊、一卷。

桃李は蕪村、几董の兩吟歌仙を收録せるのみ、然も其の序文に俳諧の流行を論じて「たとは一圓郭に添て、人を追ふて走るがごとし、先ンするもの却て後れたるものを追ふに似たり、流行の先後何を以てわかつへけむや」とて、書名を「もゝすもゝ」と附けたるなど、蕪村の識見と洒脱ぶりを想はせるものがある、安永九年刊、一卷。

續明鳥は明鳥の續集なるも、此の一篇は七部集と單行本との間に、殊に著しき相違あり、例へば七部集本は巻頭に召波の等持院寓居の句あるも、原本には第四句目にあり、原本巻頭には七部集本の第二句、即ち宋阿の「名の高き」の句を置けるが如く排列順序前後錯雜し、句を削簡脱略せるもの春の部のみにても三十餘句の多きに及ぶ、兩書の句の順序を明示せんには、各句に番號を附せざるべからず、今その煩を避けて、本書には原本續明鳥を直ちに、底本としたり、讀者若し流布の七部集本と比較せられなば、如何に誤脱の多きかを知ることを得べし。道立の序、無腸隠士上田秋成の跋あり、蕪村一派の俳句及び連句を収むる事例の如し、安永五年刊、二卷。

續四歌仙は一夜四吟の後を繼いで、曉臺、几童、月溪、青蘿の歌仙四卷を収めたるもの、天明七年刊、一卷。

五車反古は維駒が、父春泥舎召波の十三回忌追善の爲め編めるもの、亦是れ一派の連句及び俳句を収む、續明鳥と共に蕪村七部集中の大冊なり、蕪村一派の代表的句集として、將又天明俳壇の傾向を代表するものとして、必讀を要するものであらう、天明三年刊、二卷。

複刻の方法は七部集本を基礎とし、單行の各原本との異同を欄外に記入する事とせり、七部集本及び原本共に誤字と認めらるゝものに就ても、私意を以て改めず是亦欄外に記入注意する事とし、振假名及び濁點も一切私意を以て更改せず、たゞ句讀點だけは原意に何の影響も及ぼさざるを以て、新たに之を施す事としたり。

本書の校訂に方り顯原退藏、高木蒼梧兩氏を煩したる事尠なからず、附記して感謝の意を表す。

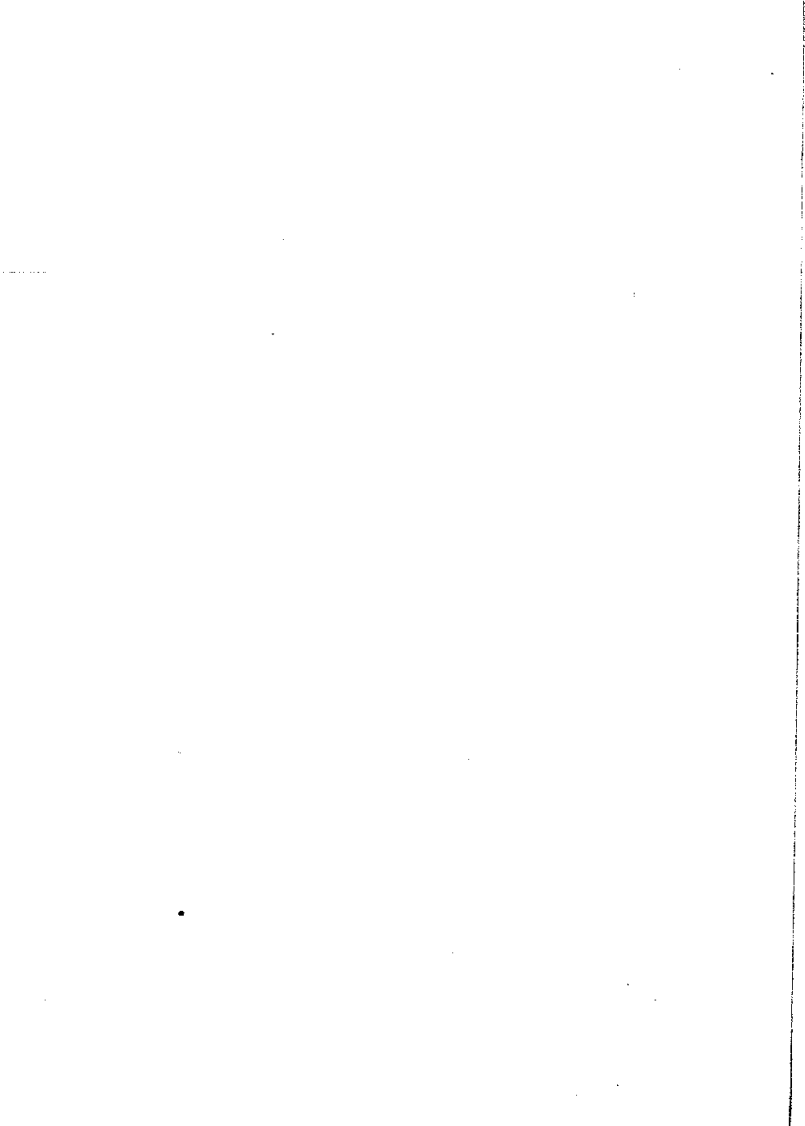
昭和二年十一月

礪川關口芭蕉庵に於て 伊藤松宇識



# 目次

|           |     |
|-----------|-----|
| 目次        | 三   |
| (例言 伊藤松宇) | 一五  |
| 其雪影       | 五三  |
| 明 烏       | 七五  |
| 一夜四歌仙     | 八七  |
| 花鳥篇       | 一〇一 |
| 桃 李       | 一〇七 |
| 續明烏集      | 一六三 |
| 續四歌仙      | 一七五 |
| 五車反古      | 一七五 |





七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

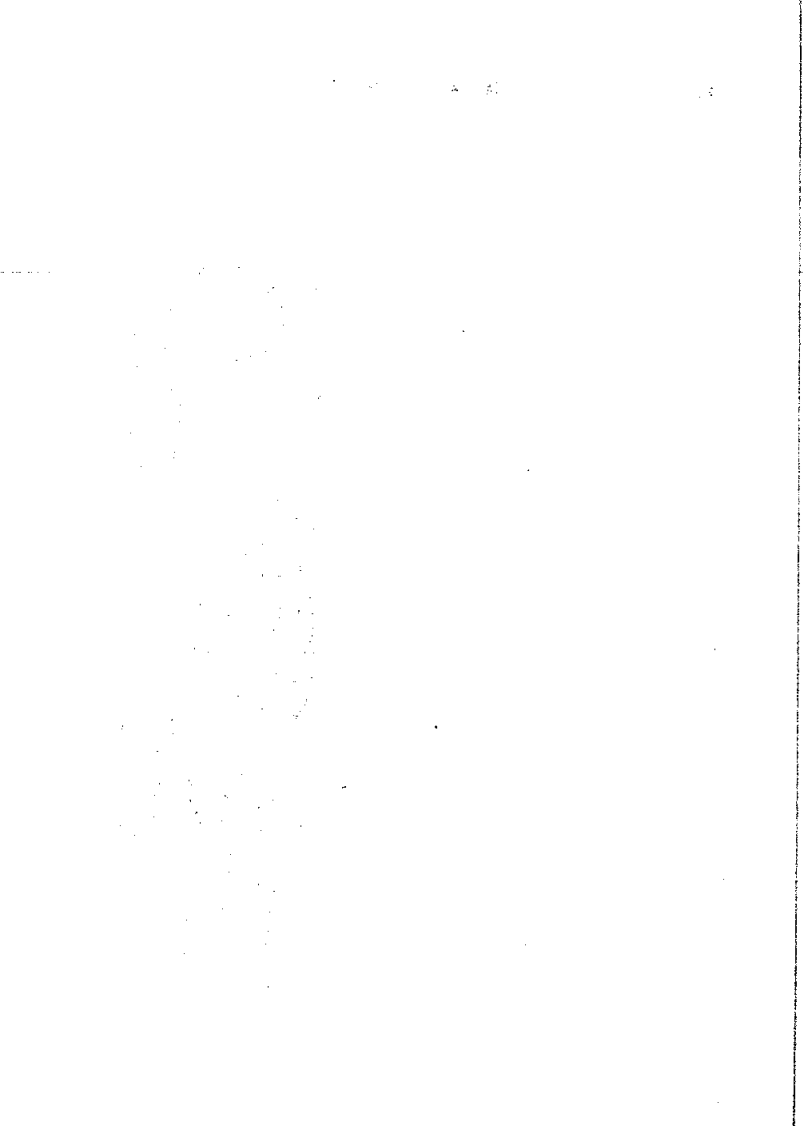
業に何こさおまゐる  
 の著作に―物と  
 元まつゐるに冊と  
 子し藝おまゐる  
 子し―世に  
 子し―子と

うささこえささこ  
 ねあしあつち  
 ちかてねく  
 文作石名



景文

蘇村翁の姓は與謝、名は寅アサナといひ字を春星と稱す、一ツに夜半亭と號ナツケしとかや、もとは攝州の人なりしが、東武に住なれて風雅に心をよせ、其人となりては洒々落々として塵俗にそまず、且暮俳諧アサナに心をゆたね、宗阿のもとによりて業成ぬ、はたおのつから書をよくす、後、京師にうつり、芭蕉堂を一乗寺むら金福寺に建つ、俳諧畫事ともに世に鳴る、門人鮮しとせず、時に天明といふ三のとし癸卯十二月に没ぬ、實に中興の首唱なりといひつべし。



○獨り—ひとり。

○また主なる—又

主なる。

○主流なりと—主

流也と。

○論つきぬ—論盡

ぬ。

○まつる—察る。

## 其雪影序

今や上候伯より、下漁樵におよふまで、俳諧せざるものなし、それか中に一家をもて、世に稱せらるゝことはきはめてかたし、京攝の際三四指を屈するたにもい  
たらす、そも／＼三四者は誰、凡圭其大指を領せり、圭はしめ巴人菴の門に遊ひ  
て、その眞卒に倣はす、かたはら半時庵の徒に交りて其聲牙に化せられす、獨り  
俗談平話をもて、たくみに姿情を盡せり、たとは／＼小説の奇なることは、諸史の  
めてたき文よりも興あるかことし、圭去りてまた圭なるもの出す、人或たま／＼  
人情世態のおかしき句を得れば、則云圭流なりと、こゝにおいて一家の論つきぬ、  
ことし十三回、其子几童小冊子を編て父の魂をまつる、世の追善集つくれるには  
やうかはりて、あなから紫雲青蓮の句をもとめす、ひとへに弄花醉月の吟を拾ふ、  
魚肉蘊藻難俎にして供するものゝことし、余曰さはよし又父か意也、かの闇室に  
こもり、せうしいとまめやかに手念珠をはなたす、稱名こと／＼しく尼法師にこ  
ひ仕へて、あやしく着ふくれたらんよりは、鶏骨床を支ユれとも、かたちかしけ  
眼うちくほみたるかたにこそ、もろこしの識者は與みし侍れ、几童之此篇其幾乎。

明和壬辰秋

夜半亭蕪村書

○校訂者日。原本  
其影は養村の  
序に次で几童の  
集本はこれ七部  
ふけり。今之を補

むかし父か在世に吐し附句幾計そや、其か中にも世のをかしき情を探、花鳥のさ  
ひしき姿を見出たる句々を集、今はた百句を並へて百韵に綴れり、こゝに一字一  
點の私をくはへすありのまゝに出せるを本意とす、さはそれてにはのさし合一卷  
の變化も覺束なし、まいて有心會釋の法にも背け、七名八體などいへる論にも叶  
はねは、まことに竹をもて木に繼るかことく成へし、しかはあれと折にふれ端に  
いたり、余か句を繋きて前後を抱、月花の足さるは門流の人／＼に譲て一卷の首  
尾をなし、父か十三回の追福とし、且知音の諸好士へ披露し侍るものならし。

高子舍几童述



臨  
 其  
 雲  
 影

晋其角



右  
ツ  
フ  
也  
蛙  
ノ  
也  
ノ  
乃  
也

芭蕉翁



其きく

糸集

そのふれ

名を

あき

うね

雪中庵 岩雪





○校訂者曰、此の  
 挿畫の影は、此  
 原本の影に於  
 ては下巻の巻頭  
 にあり、解説の  
 次に挿畫あり、  
 畫は七部集本の  
 ものと同じなる  
 雲三者の像を一  
 枚に收めたり。  
 七部集は原本に  
 比し書型小き故  
 に、解題して收め  
 るものならん。

晋子雪中は蕉翁の羽翼なり、晋子雪中は巴人菴宋阿の左右の師也、阿叟は又先人  
 か師なり、されは其系譜の正しきをもて、師夜半翁の筆を煩はして、おの／＼肖  
 像を寫して、道の榮とし、はた先人か舊知、あるは今我相しれる諸子の句／＼を  
 拾ひ、父か志を繼て、父か靈を慰することしかり。

几

董

○校訂考曰、七部  
集本は凡董の序  
文に次で巻頭の  
百韻及び凡董の  
獨吟歌仙を刪  
せり、今、原本  
其雲影によりて  
之を補ふ。

雪 になるつらたましいや松の風  
その雪かけに古ことを見  
よ き人を皆相口の友として  
さつと騒たまての田樂  
雨 も又阿るはかりのものならす  
この町筋のくれて賑か  
新月にせはしや初夜は夏になれ  
繋てもとす下駄にかうろき  
刺 齧の鹽冷しく秋ふけて  
糞にふたしてけふは朔  
忘 んと芝居へ行はそれをする  
連て走るを見せたふもあり  
物喰ねはひたるう或そわりなけれ  
發起した日に死子はよいのに  
黒 谷にちらと高野の山おろし  
廣 板間に居れは身に入  
大 船の鼻のさきなる朝の月

先人

主 同 凡 几

主 董

主 董

主 董

董 主

東國方の新米て  
 僧脇のやうにのろりといて來たい  
 上 下 は 禮 下 袴 欲  
 開 か し や 酒 に 遣 は る 花 の 頃  
 麥 あ を く と 菜 種 ま は ゆ き  
 御 影 供 に 帷 子 ふ つ と ゆ き 違  
 戀 そ つ も り て 淵 は 瀬 と な る  
 添 と け て 居 る と の 便 手 も 下 り  
 枯 れ し 葵 の 出 る は な 紙  
 播 磨 ま て 行 脚 と 連 の 轉 (マ) 奕 打  
 小 便 待 て 降 は せ ま い 敷  
 お も く と 芭 蕉 の 風 の 草 羽 織  
 亥 中 の 月 の 澄 の ほ る か け  
 崩 る ム か 躍 に 成 の あ ゆ み 也  
 捨 た 草 履 の さ て も 丁 寧  
 柏 掌 は 源 家 の 紋 の お は ム 様  
 納 所 ひ と り は 本 弓 へ 行

圭 爲

拾

圭 萱

圭 萱

圭 萱

青

圭 萱

映

○交訂者曰、鉞は  
銅なるべし。鉞は

腹立た帶は左りへ廻り過  
引ニラまくる巨燧にけふる炭かしら  
新參は且那の鉞○て逃て去  
木枕の傍に口から卷た文  
袖摺レて律を調へる琴のいと  
月の舟薪の上に墨ころも  
見かへれは花の中から一里かね  
襲ニの蹲ふことく几巾落て  
數ニ千艘みな大坂の人通

主董

主董

主董



○ごろくーざら  
う、何れか。

主 董

圭斗圭

州

見返り／＼よいとしをして蹴つまつき  
 吝さはみちん程も酔やせぬ  
 京の水目の輕うなる留主居連  
 うんといはせる棒の弟子入  
 古すたれ破れて晝のかつら影  
 臨終を待つはたに鬼灯  
 降山も間に有て野分吹  
 次良よちやと出よちかつきの牛  
 道のへに一木の花の散そめて  
 なかき日あしの藪に横たふ  
 五千石せしめる寺は雉子か啼  
 心中へはしる帯とけて有  
 傘は彌かうへにて側て見た  
 つとんと生かはる風俗  
 とこへやら夏は煙管かのらに成  
 煩ふうちか女夫なりけり  
 蠅ひとつ障子を叩く雪明り

圭 董 孤

舟

圭 牙

川

ともし燈細くいとゝ寒き夜  
 いとしほや大小差ていとま乞  
 運は他國に置いて狀通  
 歌まくら今道成寺か有たけな  
 月夜も闇も戀の世の中  
 乳母も去<sub>ニ</sub>行燈仕舞松茸屋  
 秋にあはれを添るむらさめ  
 さかやきを半分剃て悔みうけ  
 脱た浴衣へ茶碗うしなふ  
 湖をまつ泉水にそしたりける  
 獵船二艘廓にてすき  
 我役はとしに五六度駕に乗  
 遙拜の方鶏のなく  
 なつかしや在かとき花の雪  
 實其頃の春の草く

遺句七十四句

几童十八句

子曳

爲拾

李子

林曳

主董圭百

步

主董

○校訂者曰、この  
獨吟歌仙も七部  
集本には省略せ  
り、今、單本其雲  
影により補ふ。

青映 百歩 各一旬  
孤舟 牙川  
斗洲 李林

好人のひかめる道にんめ見哉  
飄に酒や春風春水  
ともすれば小鮎商ふ此窓に  
うつゝなからの答へ一聲  
講尺も薺の卷にあり明て  
白粥に置く鹽の露しも  
やゝ寒みあたにふり行伊與簾  
狐か退て戀となりぬる  
父上のお江戸詞を笑ふ也  
蛭子講されは小春のさくら鯛  
先陣は二八に足ぬ美少人  
几  
董

○百牧―百枚。

淀 過 伏 見 墨 染 の 里  
 門 徒 衆 ひと つ い ふ て は 諸 な み た  
 遠 い 縁 者 に 隣 遣 は れ  
 開 か し い か た 手 に 搔 は 花 鯉  
 四 季 お り く に 疝 氣 寸 白  
 追 從 に 己 か 威 勢 を と り 交 て  
 駟 あ た り の 堤 崩 る  
 ほ と き す か は かり 腹 の 立 時 に  
 今 撞 か ね や 是 生 滅 法  
 小 便 の い そ け は 廻 る 山 お ろ し  
 草 葉 の 露 に そ ほ つ 雁 瘡  
 あ は れ さ も い と 月 夜 の む し の 聲  
 秋 か た り 合 桓 楚 周 蘭  
 饅 頭 を 九 十 九 喰 ふ て 明 に け り  
 變 化 屋 敷 に 障 子 百 牧  
 棕 も 枯 榎 も か れ て む ら 烏  
 土 は し の 長 さ 水 と こ ろ く

○校訂者曰。是より以下七部集所

のうく且那御刀か駕に候也  
 浅黄のきぬのよこれ安くも  
 長次郎の赤贋物を見せに來て  
 立旅宿のかも井皆あたま打  
 ひいては都は花の雲井より  
 ひかしは長閑西は麗か

ゆくくの澁はつかしや柿の花  
 隣つゝきに茂る生垣  
 あき人のよききぬ買に通ふらん  
 時分ならねと飯の相伴  
 御坐船の淀おろせは月いなか  
 かしこの隅にうすきいな妻  
 負腹に角力の故事をいふて居  
 藏やしきにも足らぬ勘定  
 三日ほと廓を見ねは煩ふて  
 心ひとつに惑ふ占かた

子  
 曳 董 曳 董 曳 董 曳 董  
 董

○なり！世。

○うち一内。

其

雲

○此ころ！此頃。

影

○忘れきて！わすれ来て。

此多はこちの椿も咲そふな  
手張の緩ひつみかちなり  
長尻か借りに來た物置て行  
翌の年忌の佛譽られ  
朧月おかしいといふ天氣にて  
笠のうちななる瓢の初花  
出かはりを惜しまれおしむ道艸に  
祇園清水ゑひもせす京  
此ころは宗盛殿をもてあまし  
我等か假名二合半平  
眠たさの閨に禪を忘れきて  
鹽の水をかける石菖  
狗のなしみてとれも捨られす  
供に出ぬ日は米春ている  
ちらくと雪になり行八ッさかり  
好の道なりやわせそふなもの  
生酔の良へかけたる蜘蛛の糸

曳董曳董曳董曳董曳董曳董曳董曳董曳董

○たかき—高さ。

○下陰—した陰。

かくしたふりをさし足て見た  
 ふるされて月も恨る後の朝  
 うら枯なから薺はさく  
 ゆく秋に鶏の手疵を隣て  
 庄屋か息子いっつも十八  
 宮領へなたれし谷の白妙に  
 草の中より水氣たつ見ゆ  
 枝たかき松をむかしの花二木  
 巢を出る鳥の鶯の長き日  
 欠くて月もなく成夜寒哉  
 秋しつかさに謠一番  
 やへ葎餘醺瀉賣も見かきりて  
 遠山高く遠山低し  
 朝風に水主も烏帽子を着たりけり  
 日記も扇に書てことたる  
 究竟のこの下陰よ藤若葉

董 曳 董 曳 董 曳 董 執 筆  
 村 護 董 村 竹 几 燕 村 董 護 村



## ○春のよ—春の夜

魚 荷の蛸を所望して見る  
 逗留ものらりくらりの惟然坊  
 よい葬禮に大津八町  
 冬空の七ッも聞す夕くれて  
 なれ衣濯くなみのうねく  
 戀くさの何をたねにや云よらん  
 ともし火消えて春のよの月  
 憎まるゝ鳥も花の森へゆく  
 獨活の苦みも大原三唸  
 用の有時は童の見えぬ也  
 庖瘡神の小言はしまる  
 ナ土佐駒に光輝く鞍鐙  
 五日の風のわたる葉さくら  
 かはらけの干間うつくし狹庭に  
 書記も典司も放參の休  
 狸とはしりつゝも又碁を圍  
 身は人質のとしも去々めり

護董村 護董村 護董村 護董村 護董村 護董村 護董村



加茂 紵宿に寐もしつ郭公  
山出しの揃はぬまゝをしくれ哉  
宗阿  
圭

右夏冬一紙兩筆の反古は、高子舎の匣中に藏しを、今追善の  
後に録。

○以下は其雪影の  
雪影にして其  
雪影の卷首に  
の解る其角等  
像あり、次に  
とあり。春夏之部

○はるの水―春水

春夏之部

春のうみ終日のたりくかな  
朝かすみたつや夜舟の枕上  
千金の雨夜見捨てかへる雁  
山吹や序に覗く隣あり  
伏見南山眺望

鳥寒し生駒につく春の水  
五器皿を洗ふ我世やはるの水  
爪かくす日頃わすれて猫の戀  
苦は花に残して梅のすはえ哉  
最前に起てもよきに春の雨  
出かはりの疊へおとすなみた哉  
暮春

ゆく水にもの書春の日數哉  
日のあしを洗ふてのはせ春の雨  
斗五  
文律

燕  
几  
董  
村  
爲  
子  
曳  
拾

移  
竹  
几  
董  
爾  
扇  
波  
祇

斗五  
文律

○んめやしきーん  
め屋敷。  
○なにはめーなに  
は女。

うたゝねに使三度や春の雨  
物申やうくひす答ふまはら垣  
へたゝと笑て下手な聲哉  
人はまた嵯峨に遊はす梅きゝす  
行春や竹の伏見と成にけり  
鶯や木に竹繼て行もとり  
苗代やある夜見初し稻の妻

臥龍梅を見にまかりて

んめやしき京なら梅かやしきかな  
なにはめや京を寒かる御忌詣  
山かけや菜の花咲ぬ春過ぬ  
瘦んめや酢藏のかけに二三りん  
詩に歌に口も酸くなるんめの花  
水門を柳の叩く月夜かな  
いとゆふや埃にしらむ町の松  
水に添ふて橋たつぬるや朧月  
一里ゆき二里行深山さくら哉

几 朱 壺 牛 鳥 百 几  
董 英 角 行 西 池 董  
竹 護 燕 村 馬 几 九 南 鼓 三  
山 董 湖 董 董 湖 董 湖 董 湖  
カ 三 四 坊

○柳かな—柳哉。

○初日はつ日。

○梅の—んめの。

川波の梢にとく柳かな  
我影を捜す老木の柳かな  
麓には水のつめたき初日哉  
七夕のうたかひはるゝ汐干かな  
春の風濁らぬ川はなかりけり  
枯たかと鳥のおれは梅の花  
雪はみな地へしみこんて梅の花  
春風にいつまて栗の枯葉哉  
蝶李子如本州鼠仙里

むかし凡圭行脚の志ありし時

都方よりと聞は諸國の地蟲出ん  
松伐たあとの日なたや山さくら  
よしの出て虵のはなれぬ袂かな  
花さくや見て置へきは因果經  
元日や非をあらたむる非のはしめ  
朝霜や鶏のつく若菜うり  
野鳥の腹に蹴てゆく春の水  
菜の花や黄昏時の經の聲  
管祇舞紹武宋凡羅江  
鳥空雪簾然屋董江

○校訂曰、衛は衛  
の誤ならん。

○さつき一き月。

致仕

土くれに何の花そも春の雨  
洗足の盥も漏りてゆく春や  
旅に寝て古郷の春を惜しみけり  
隴夜やおり居の御所の月の松  
桃おれは皮むくれけり花なから  
雨そはつ春の名残や茶一椀  
青柳や二すち三筋老木より  
盃もさゝは衛ん牡丹かな

蛇の見かへりもせぬはかま哉  
人ならは上戸なるらん夏の月  
寝たらぬはうきよの人そ一夜漬  
川下に難波もあるか眞菰賣  
毎年の長逗留やさつき雨  
青んめを見付出したる旭哉  
雪にせは行丈積ん五月雨  
春喰ふた草にてあつき垣根哉

嘯<sup>エト</sup>柳几土晋春蕪德  
山居董髮才武村圃

兔十春三光和鳥杜  
足拾海角甫流門口

○由福・田福。

○浮ぶ―うき世。

○ほととぎす―郭公。

○七郎集本作者名を無くも、原本に「同」とあり、五律の句。あつさ。曇。

○遠かな―遠隔。

酔をもつて可也とやせん初鑑フクヘラ沙月  
 かやり火の燃てかくるゝ二人哉 水翁  
 明やすき夜を朝かほの二葉かな 由福  
 曉の一言ぬしやほととぎす 召波  
 時鳥きのふ聞しかかんこ鳥 維駒  
 蓮もまた浮よをわたる水の上 羅雲  
 干網に一聲かゝれ郭公東武泰里  
 梅の木や實はむすへともほととぎす 五律  
 桑畑に喰ひつふしの毛蟲哉 青  
 小豆餅賣そゝくれしあつさかな 子曳  
 撞かねの供養も果て合歡花 自笑  
 ほととぎす月輪かけて白雲寺 鏡僧  
 郭公工藤のかりや寢入けり 几董  
 湖の水かたふけて田うへ哉 馬南  
 雨覆ひの廿日ふり行牡丹哉 來爾  
 朝日より先へ開きし蓮かな 曲室  
 あり明の月も浮葉や蓮の上



○夜かへーころも  
かへ。

○よー夜。

○さつきー麻月。

手も足も口も只居ぬ田植かな  
灰汁桶の輪も入かへん更衣  
五斗俵の地をはなるゝや衣かへ  
山ひとつあなだ丹波や雲の峰  
夕かほや秋は狂歌の種瓢  
古井戸や蚊に飛ぶ魚の音聞し  
古妻を壓に置はやひと夜鮎  
夕風にあとなくなりぬ雲峰  
河骨は肥たり水はやせる時  
寺の庭をぬけて道なし蟬の聲  
みしかよや寢かへる窓の朝ほらけ  
草まくらかやり火焚て寢入けり  
笛の香の船に飽けりさつき雨  
鮎に此命のかれてはつかつを  
日盛や蟬は眠りて瀧の音  
磯多村のうらを逃行清水哉  
柴垣のさはると折れる暑さ哉  
ナニハ周  
九湖  
魚赤  
几董  
百池  
うせ  
燕村  
竹護  
鶴英  
如本  
岢嵐  
明五  
文皮  
徳野  
渡牛  
鉦丈  
几董  
禾

○かな—観。

○几董—几造

○はやし—早し。

○きて—来て。

燕 村 七 部 集

夕 立 や し か 傘 の ひ と つ 松 <sup>ニト</sup> 栢 延

と ふ 螢 あ れ と い は ん も 獨 か な 太 祇

書窓懶眠

學 問 は 尻 か ら め け る ほ た る か な 燕 村

こ か れ た る 雨 を 握 て 田 う た 哉 几 董

ほ と ぎ す 啼 や 木 曾 路 の 初 さ く ら 素 山

螢 見 や 此 宵 闇 に 舟 は や し 峨 眉

な か れ き て た つ や 螢 の 水 は な れ 孤 相

夜 通 し に 壁 塗 あ け る 蚊 遣 か な 几 董

と も し 火 の 命 の 長 き 涼 か な 李 琳

心 な き 石 と も 見 え め あ つ さ 哉 五 始

今 聞 て 直 に 戀 し や 子 規 風 狀

象の登りけるとしに

今 や 牽 富 士 の 裾 の へ 蝸 牛 仙 鶴

其

○忘れ—わすれ。

○かな—哉。

雲

○靜—しつか也。

影

○白露—白つゆ。

○行暮て—ゆきく  
れて。

## 秋冬之部

踏脱た足にて着るやけさの秋  
 とろく／＼と寝る鳥あり十三夜  
 啼鹿や晝見た形の忘れたき  
 清光の目をあゆませる木の間哉  
 さむしろに機織虫の夜なへかな  
 光るほと夜は静なり露の玉  
 島原も龍の都歟霧の海  
 白露ののほる力や草の丈  
 鸚の雷晴れてけさの秋  
 手にさはる金の蔓や今朝の秋  
 行暮て案山子を草の枕上  
 棚経や出て氣のつく門違  
 双六の石もまはらや菊の宴  
 市 中

依 自 子 斗 几 万 有 古 菊 五 梅 杜  
 ナニハ  
 雨 笑 曳 文 董 翁 闇 梁 溪 友 實 口 水

○野分—のわき。

○江戸—エト。

○しくれし時雨。

い な つ ま や 隣 の 藏 も 修 覆 時  
 秋 の 暮 毎 日 あ つ て 淋 し け れ  
 秋 風 の 人 の 心 に 立 に け り  
 魂 棚 や 鼠 も つ か す あ は れ 也  
 い な つ ま や 梟 の 臥 と ころ ま て  
 草 花 の 屏 風 を 疊 む 野 分 哉  
 兀 山 に 角 を 木 影 や 鹿 の 聲  
 花 鳥 の 柱 売 も ゆ る 紅 葉 か な  
 酒 買 に 千 里 の 外 や け ふ の 月  
 名 月 や 落 る も の と は 思 は れ す  
 萩 の 花 追 く こ け て 盛 か な  
 花 を 葉 へ し は し 授 て 露 し く れ  
 名 月 や 野 す へ の 雲 に 人 の 聲  
 揚 屋 出 て 大 門 を 出 て 秋 の く れ  
 明 六 つ を し ま の 鐘 歟 虫 の 聲  
 名 月 や 下 戸 の 建 た る 藏 引 ん  
 明 月 や う つ む く 物 は 稻 は か り

几 嘯 雅 爾 季 也 且 江 戸 訥 几 竹 孤 青 南 樓 <sup>エト</sup> 田 多 宗  
 董 山 因 遠 遊 好 爾 子 董 護 舟 映 雅 川 女 少 專

○校訂者曰。光は  
先なるべし。

物かはゝ上京にありけふの月  
名月や寶の山は鼻の光  
栗めしもゆかしき月や菊の宿  
名月やをのく當坐なかりけり  
我かけの皆になるまで月見哉  
蔓ものゝ花咲にけりけさの秋  
天地の心を分んけさの秋  
かゝしから苗一すちや秋の雨  
雨乞の小町か果やをとし水  
ゆきの日や近江の鐘も聞ゆなる  
しくるゝや誠の暮は鳥さはく  
見足ぬをはつ雪とこそ申なれ  
詫禪師關も咎めぬ頭巾哉  
駕を出て寒月高し己か門  
煮凍へともに箸さす女夫哉  
朝めしのうきよになりぬ鉢叩  
夕かほのそれは獨體歟鉢たゝき

嘯 嬰 白 俵 二 春 舞 几 蕪 羅 几 雅 ユフキ 雁 太 召 田 蕪

山 夫 麻 雨 貞 爾 閑 董 村 人 圭 因 宕 祇 波 福 村

○人つかひ—人還  
ひ。

河鯉汁や偕火をともしよくみれば  
枯木からしほり出したるしくれ哉

旅行快天

あけほのやあかねの中の冬木立  
氷より先へ碎し手桶かな  
夜のほと風の手に際や薄氷  
水鳥の朝日に眠る霜夜哉  
うくひすの忍ひ歩行や夕しくれ  
天津風名もしれぬ葉の落にけり  
御秋や春はかならずと配けり  
有て過て脊戸の水仙咲にけり  
夏瘦のもとらぬ顔や鉢たゝき  
はつ雪やふりくかへる牛車  
行としやかはらて積る莖の石  
けふはかり人つかひよし河鯉汁  
柳にもかへり花あり初しくれ

蝮の毒にあたりて漸まぬかれたる友のもとへ申やり

斗子 几馬爲五太虹山之漣三と白羅

文曳 董南拾律祇竹竺房月貫く麻雲

影

雪

其

○見たか—見た歟

○小角力り—小角  
力か。

○寐覺—寐さめ。

○隣—隣りの。

○寐—寢。

○校訂者曰。露が  
落ナルヘシ、  
な—哉—竹裡。

て猶もいましむ

星月夜空にはくれし時雨哉  
 虚無僧の物いひかける枯野哉  
 しくるゝや置かへて行にはたすみ  
 零露て關寺諷ふ頭巾かな  
 老夫婦世を住よしの巨燵哉  
 堅戸樋の中は早のしくれ哉

毛氈に寐たる心の小春かな  
 鉢叩の着たはあかつき衣哉  
 暫くはあたりに隣りの巨燵哉  
 ふく汁の我活ている寐覺哉  
 寒空に皮を剥るゝふくと哉  
 人心いく度河鯉を洗けん哉  
 小角力り物荷ひ賣師走哉  
 煤拂て障子張日や梅一枝夢  
 それ見たか全鯉の蝶の夢

土竹几斗瓜孤 桃波漆蕪必太丑、吞  
 丸裏董洲流舟 序光翁村化祇二 獅

○ふくしるーふく  
汁  
○吮ー喰

○ゆきー雪。

集 部 七  
○おもひー思ひ。

○あしきー百敷

○やま山。

○賣ーうり。

鯨汁や銅のかたふく古疊  
 ふくしるや吮ぬ程たにあはれなる  
 生花にこと欠く頃や枇杷の花  
 隠し子の年員へいる火燧かな  
 雪折や雪を湯にたく釜の下  
 戸に犬の寐かへる音や冬籠  
 初ゆきや道かわるいとぬかしおる  
 唇手の茶碗もとしの古ひ哉  
 おもひやる時雨の中や筏さし  
 水底の海鼠にあたるなまこ哉  
 太刀持は雪にころんて見えぬ也  
 四布五布身のかくれ家のふとん哉  
 もしきやさくら枝を煤はらひ  
 雲淋し冬はあらはに北のやま  
 賣くてひとつ凍へる海鼠哉  
 ほふかふりして懷手して唇賣  
 竹は寐て雪またゆきの里續  
 猫斗賀柳震蕪龍泰阿買旨存  
 大坂三  
 漁來曲芦  
 帳文瑞女吹村眠里誰明原義蝶焉雨室



○寐：寢。歸り  
かへり。

○まはす：廻す、  
閑乙：閑々。  
○白梅：白んめ。

○かな：識。

○くさ：草。

○か：歌。

○逃：逃。

海棠の又寐の夢歟歸り花  
來之

としの根も洗ふて流せ芹根水  
盛住

なてまはす山のあたまや遠しくれ  
閑乙

白梅や雪の中にもをしへ道  
嫩艸

豆腐挽寐さめの友や寒念佛  
有種

一渡しおくれた人にしくれかな  
暮サヌキ  
麗牛

かれくさの根ほり葉ほりや雪轉  
隨古

時雨たか今朝は緑の麥門冬  
隨古

遠くてちかきものといへる當座題に

夜嘶の寒き田舎の隣哉  
必化

忍はしよはやり頭巾の主ならは  
多少

なつかしき月の栖や大みそか  
移竹

逃てゆくとしやるまひそく  
竹護

雪時雨

早打の先へはれ行しくれ哉  
子曳  
几董

夙に起てみそかの月や草の雪  
几董

○きてー来て。  
○きよしくれー小  
夜時雨。  
○宗阿！宋阿。  
○雪ーゆき。

ぬれて照柳にはまたしくれ哉  
初戸と同し道きて松の雪  
既に來るあし音よそへさよしくれ  
はつ雪や雪にもならて星月夜

宗 宗  
阿 是

○ころー比。

○知れるーしれる  
に。

○いひー云。

○心なりー心成。

○祭見るー巻を見

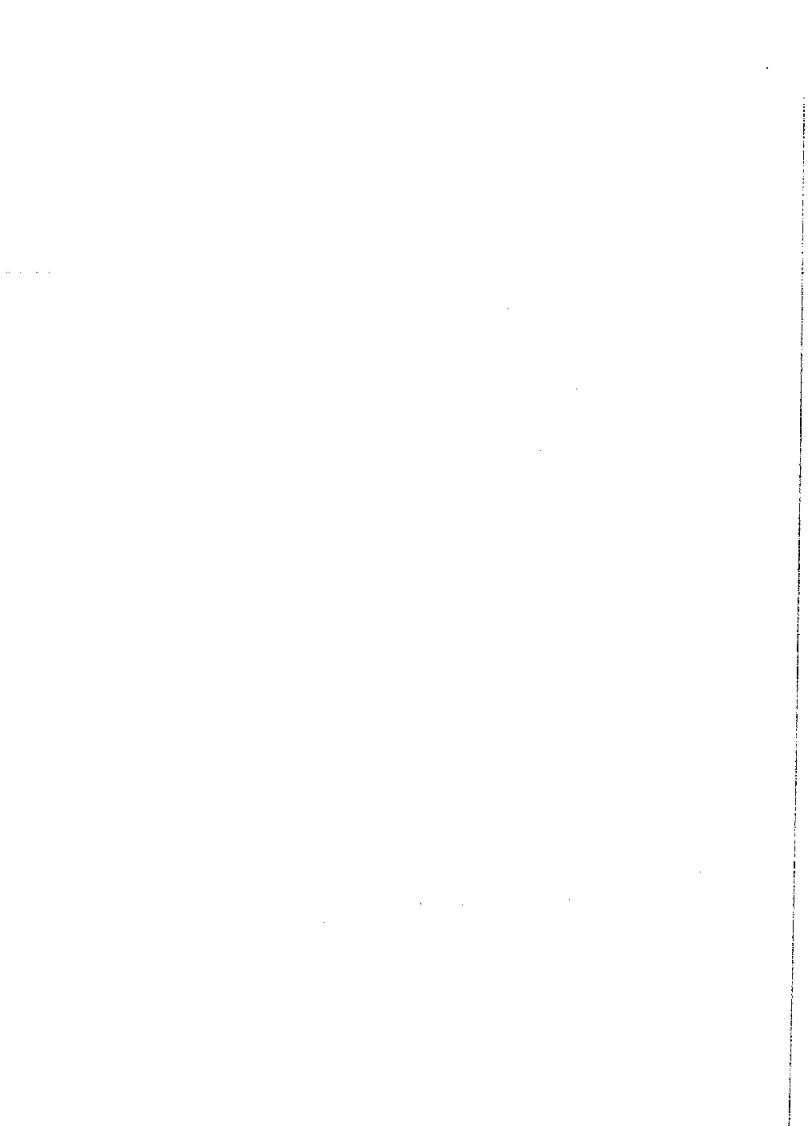
○近ころー近頃。

○逸なりー逸也。

○見つーみつ。

## 跋

凡圭は心をもて師として、よく俳諧の世情を得たり、壯なりしころより、洛に難波に名をひゝかしめ、他をは外國のこと思へること、人みなしれり、さるを晩年にいたりて、やをら古調にも意をよせ、音知れるとち三五人、鼻つき合せて次句せしことも度／＼なりしに、やゝもすれは半過るころ、空嘯き手まさくりて、早らうしにたれはあか癖の出るそとよなといひけんことの今も耳に残れり、此叟か自得せるには、いとすせうに無我なる心なりけらし、今年童子か其句もてつゝりなせる巻見るに、近ころ世にもてはやすなる、梅路希因か輩の逸なりといふめる句の調またく阿堵の中に具せり、實も／＼一家なりけりと、且よみ且舊きを懷ふて筆をとれば、折から軒端にちかき萩芭蕉に、吹わたる風のおのれ／＼か音をなして、其世の月のたそかれの窗にさし入佛も、亦見つのえたつ中の秋の十三夜、丈人嘯山書



## あけからす

俳諧に不易流行の沙汰は、こゝの書に譲りて暫くさしおく、今やよの風流漸變化して、其流行にとゞまる有、前ふあり、また後るゝあり、しかりといへとも、都て蕉翁の光をたとふの一に止れり、夜半の叟常に我にいへらく、今遠つ國くのもはら蕉門といひもてはやす、やゝ翁の皮肉を察して、其粉骨をしらざるもの也、たとへは附句に敵よせ來るむら松の聲、有明のなしうち烏帽子着たりけり、これらの意を味ふの徒希也と、今や不易の正風に眼を開るの時至れるならんかし、既尾張は五歌仙に冬の日の光を挑んとす、神風やいせの翁ともてはやせし麥林の一格も、今は其地にして信せざるの徒多し、加賀州中に天和延寶の調に髣髴たる一派有、平安浪華のあいたにも、まことの蕉風に志者少からず、爰に同志月下菴馬南、去年の秋西海の邊りを行脚し、ことし夏のはしめ洛にかへりて再會す、其流行を語るに、余か方寸に察に違す、一夜我庵中に今古を討論し、夜闌に臥かとすれは、忽然として一聲の初音をきく、とみに起出て今ひとこゑの聞まほしかほなるに、はや曉雲東嶺に横ふて、人の面も白くくと、古き夜明のけしき哉と打誦しければ、月下頂を敲て歎して曰、汝早くも流行をしれるもの哉、古き夜明の

あるしならめと、言下に花橘のワキを次るよりして、終に六々の首尾をなしぬ是を櫻木にちりはめんはいかにと、ひそかに師か閨を窺ひ侍けるに、打點頭て汝子規の一辭に發明せるかとし、惟ふに汝か信するや晋子也。

それよりして夜明烏やほとゝきす

此句の心によりて此集の題號を、明烏なとよはんも可なるへしと申されしより、例の拙き筆にまかせ、よりく聞えたる發句とも、且我門に遊へる徒か卷くまでもつらそへて、めつらしからぬ小冊子となし侍るのみ。

安永癸巳之秋

高几董書



しらへあはする笛の一聲  
海士人の蛸打敵く砂の上  
小錢とらせて道の案内  
大雪の跡さりけなく晴わたり  
肌足に成て見たる傾城  
川の瀬の浪のうきくさ浪荒き  
七日に満る暮のおこなひ  
桑の弓蓬の矢聲響くなり  
身をなく狐秋やしるらん  
かり枕雨の更科月ふけて  
酒の機嫌に澁柿を喰  
いつの間に冠者は男となりけらし  
とし經し公事のさらくと濟  
翌植ん門田の早苗風わたる  
何におとろく一群の鷺  
この宮も正八幡と聞からに  
海の朝日の蔽もれ來る

、 董 、 南 董 南 董 南 董 南 董 南 董 、 南



さくら咲あたりの花に培ん  
名利薄らく長安の春  
南

春三月於高子舍興行

山吹の繩ゆるされて盛かな  
掃ちきりたる庭の春風  
よき人の嘶の答へうらゝかに  
杉の器の匂ひゆかしき  
銀に川の流るゝ夏の月  
團持手をうしろにてくむ  
小草生ふ軒の瓦の落かゝり  
晝から晴れて行遠ふ雲  
大津まで廊の鴛を飛す也  
うつりかに泣くものゝふの袖  
つれくゝと硯に墨を摺ためて  
かゝくる燭し一葉ちりくる  
長き夜に鳥もねまとふ月の下  
九  
湖  
角 曳 容 甲 キ 湖 雄 芦 嵐 万 路 キ 董  
尙 角 甲 容 曳 董

縁  
縁

身は、も狭き菅蓑の露  
 栗栖野や竹田を右手に醍醐山  
 腹を減しにうそくと思ふ  
 暮残る花を盗んとそ思ふ  
 燈かけ驢に神主の窓  
 春の雨他人ませすの連歌して  
 これは花香のぬけた一森  
 圃借し禮に本尊を拜みけり  
 夕風にいさ明石まで出ん  
 むらは衛耳の邊りを筋違に  
 かはらしものを探す妙薬  
 大小の錆も元し世に住て  
 橋に日をいとふ縁光  
 姑と中の能過てこまる也  
 洒落に染た盆のかたひら  
 黄昏や月のちめく雨のあと  
 築地のやねに草の花さく

角 容 尙 湖 曳 角 湖 甲 角 キ 甲 曳 容 尙 キ 湖 尙

俱せられし従者は外面に打眠  
 袖に拂へる藤突の塵  
 鶏の小高く飛し朝日影  
 橋かけさせて通る大名  
 めし櫃を抱へてもとる花の主  
 しほり戸をこす蝶のふるまひ  
 角容キ尙甲曳

## 夏卯月朔臨時會

灰汁桶の輪も入かへんころもかへ  
 垣のあなたにさける卯はな  
 しのゝめの駒牽つるゝ旅に出て  
 角力に呼んで見たき山の名  
 中秋も十日あまりの晝の月  
 障子明れば蘭のにはへる  
 勅定の撰集半成就して  
 睡にかゝる白髪ひとすち  
 枕あけて宿酒の料理好ミけり  
 魚 几 赤  
 上九更樂 竹 春 桃 布 赤  
 立 牛 蛙 裏 瓜 董

雨したく<sup>く</sup>と夕くれる空  
 差つけぬ刀の重さ長堤  
 我かけなから我におかしき  
 養生のけふも麥めし喰過し  
 裏は隠居へ行ぬけの町  
 梵論呼て鶴の巢籠籟せはや  
 裾に亂してしまふつひまつ  
 とかくして月も出たり花の宴  
 あふみや人よ我國の海苔  
 滞留を降こめられし春の雨  
 假名にて書ヶは長ふなる名しや  
 目しるしの橋は普請に行過て  
 干鰯の市を吹送る風  
 帷子の糊も立たる雲の峰  
 ふたんだ駄はく女有けり  
 さるほとに面目もなき戀の闇  
 調へもゆるむ斷食の中

瓜裡 春牛 立裡 赤裡 瓜裡 春牛 立裡 赤裡 瓜裡

(桑一亭)

狭くても居り馴たる四疊敷  
 葉こしに見ゆる翌の薨  
 客僧の小便しけき夜半の月  
 首筋寒く尸わたる聲  
 船玉の神酒をしつかに下る也  
 腕へかけて疝氣引つる  
 軒の雪打しめりたる炭俵  
 桑雀の餌を搜すらん  
 散いそく花を散らして花盛  
 うれしき道に出る春の日

## 四季混雜

不二ひとつ埋みのこして若葉哉  
 蜂の巢に虻の訪よる若葉かな  
 あけほのや乞捨て行猫の聲  
 ともし火のちとりに動く涼川  
 瀬にかはるよしなしことや門涼  
 鶯の隣へ赴てはつ音哉

燕 九 魚 竹 萬 基

立 瓜 牛 春 赤 立 春 牛 瓜

村 湖 赤 裡 容 董

異國の僧もおはして蓮見哉  
 うくひすやもとりかゝりし垣の内  
 酔て寢た日のかすくや古曆  
 寒梅や念者を見舞ふ枕上  
 行春の裾をからけよ藤の花  
 投られて酒債飛散ル門角力  
 古蜩のほころひ口やけさの秋  
 蝙蝠に人商ひの噂かな  
 一頻春しつまつて藤の花  
 馬梁雄龜布芦キ路嵐  
 南瓜尙公立角萱曳甲

納涼

三つふたつ星また暑し夕すゝみ  
 酒ゆるすくすしも見えて夕すゝみ  
 かはほりや風に吹るゝ洗髪  
 萩の戸の馬の行衛やけさの秋  
 もろこしの詩客は一剋の宵をおしみ、我朝の歌人は  
 むらさきのあけほのを賞せり  
 春桃几子  
 蛙牛葦曳

春のよや宵あけほのゝ其中に  
 蕪村

春の夜や鞭しらへる誰か家  
 つはくらは朝起なれし八軒屋  
 冬かれや姨捨に月も捨て有  
 稲妻やされは夜來る杉の間  
 山吹や金のすたる水の底  
 むら雨のまた干ぬ町に踊哉  
 田我百池笑  
 福則

## 自悔

沈醉に夢も夏野のしかいふな  
 月花を軒へ寐に來る燕哉  
 五多  
 雲少

## 市中

朝霧の爰も浦はや魚の店  
 孤舟

## 野行

朝露や膝より下の小松原  
 几  
 萱

## 夏冬

旅なれて見ゆる馬上の團かな  
 大坂万  
 翁

忽に餅の生る木は柳かな  
 燕村

鮎の面々世上の人を白眼  
 哉

峽中歸

老樹枝たれて行道暗しかんこ鳥五  
 古寺や月の今宵も經の聲斗  
 無住にてとしく萩の盛哉子  
 戀くとして柳遠のく舟路哉キ  
 つはくらや御堂の太鼓かへり打也  
 動くとも見へぬ田螺のあゆみ哉維  
 朝きりや二人起たる臺所几  
 行春や又此ころのとしわすれ東武西  
 嵯峨行の揚屋出けりけさの秋越後一  
 音

竹酔日

たゝたのし竹植たるもひとり坊仙臺丈  
 笠の露も杉の匂ひや霧の朝得夫吞  
 其中のひとつは落よ凡巾大阪舊  
 夜をかけて青きにかへる柳かな伊豫宗  
 戀こめて妹か手傳ふ粽かな青  
 居



いなつまや風情を亂す月の雲、花  
 鳥も啼す時雨なからに日のくれぬ、故雀紅  
 露深く薺の花の并ひ哉、開詩  
 初蝶の寄るもかよはき笹あらし、素後  
 けふの月空に心のすめるかな、桂舟  
 閑さや花にそふたる庭の月、茶州  
 竹に見て野邊なつかしむ深雪哉、羅父

題閑居

梅かゝに、おとろく梅の散日哉、いせ橋良  
 んめ咲て十日に足らぬ月夜哉、名古屋曉臺  
 蓬萊に聞はやとは

翁の歳旦也

行春やいせのたよりもあまたゝひ、几董  
 松の月それさへ春の名残哉、馬南  
 春のよや杖曳たらぬかもの町、嵐山  
 苗代や鞍馬のさくらちりにけり、燕村  
 若竹や暗かりはしる水の音、甘地鳳  
 鵲

日の洩りて里守神の新樹哉 俗布

ある僧右味因果に

句ありやと問に

あさましや笹も同じ雉の聲 加古川半 拾

さしわたし六尺はかり梅の月 洪 園

厂もまた鳴や沼田の朧月 五 橋

遅さくらなしに交りて咲にけり 高布 舟

尾上鐘

牙けるは此鐘なりし夜アの霜 馬 南

山清水靱左りへまはりけり 結城雁 宕

關の戸に秋風はやし麥畠 江戸泰 里

今朝秋としらて門掃男かな 存 義

同性俳をたしむ此頃改名して蘿音といふといへり余

曰藤蘿もと音なしいかなれはとそれこそ俳のさびし

みなれと此一句に驚きて

我のみの身にしむ風や蘿の音 堀 更

五加木垣隣に酒を買はせけり 蘿 音

家主の摘にわせたるうこき哉  
 力入て鐘つきにけり生野素月  
 散てさへうきに椿の落にけり  
 蝶のきてこの山さとの春邊哉  
 山吹や銅炭流す人は誰  
 和らきし水より出て芦の角  
 菜の花の一反はかりさかりかな  
 谷河の幅廣くと夕かすみ  
 烏帽子きた人の影あり夜の梅  
 桃の花一條殿の覺かな  
 名月や源ちかき御溝水  
 洛より嵯峨へ歸るとて  
 武嘯翠髭東涼竹跨五丸由董  
 然山樹風走秀也仙丸由

人／＼に申のこす

別路に露はあれとも雪駄かけ  
 日に逃てむしの啼ねや艸の露  
 白露や命はありて枯木哉  
 白露や露ふる庭の草の中  
 秀雅  
 南雅遊  
 雨雅

達 戸忌を壁のなこりやきりくす  
 風 に 負ぬは松の力かな  
 や ふ入の藪かきならす 蔭臺  
 櫻 く 本尊 観は 釋迦 如來  
 我 魂と人や見るらめ 鶉の 筋  
 蠅 打をのかるゝ 蠅の 命かな  
 溜 り 水股かけてや 雲の 峰  
 ほ とゝきす 舟さし 向し 淀の 端  
 岡 に 出てあらはに 鹿の 啼夜 哉  
 隴 月 淀の わたり の 水 の 音  
 唐 音もすこしい ひたき 牡丹 哉  
 萍 や 風 に ゆらるゝ 葉も 花も  
 白 雨 に しはらく 土の 匂ひ 哉  
 獨 り 出てかたふくまでや 夏の 月  
 客 僧よ 宵に 申せし 鹿の 聲  
 題 禰宜扇  
 番 禰宜の 晝も 蚊を 打あふき 哉  
 吞 明 舞 德 文 管 德 自 芦 宜 潤 賜 キ 二 湖 嵐  
 獅 五 閣 圃 皮 鳥 野 在 隱 路 李 馬 萱 貞 柳 山

○不石

## 春夏秋

帆をはるとまては見えしか隴月 浪花一  
 暑き日や野邊行人の見えて猶 ム  
 竹深しいなつま薄き夜明かた 几  
 董

九月十三夜

後シテの面や月の瘦男 ム  
 牡丹散て打かさなりぬ二三片 燕  
 木槿にも松にも露の一夜哉 浪花米  
 よき友のくすし見えけり日の盛 馬西夏大  
 秋惜しと一聲むしの鳴音かな ム  
 七種の花の夜明やわたり鳥 女た  
 朝露や是も案内の不調法 雄  
 白髪にもならて戻ルや銚の兒 羅  
 孫の手をかふとて老の踊かな 樵  
 押わけて他宗の通る十夜哉 一  
 動かねはとんとりこかぬ柳かな 右  
 蟬の音に人も喘くや鳥羽繩手 寸  
 馬瀬鼠風川山め魯園村

月と水の中を隔る落葉かな  
 旅人の互に名乗る夜寒哉  
 入相はかねて覺悟や三井の秋  
 やふ入の兒に馳走や釣小ふね  
 山吹や谷一筋の春のいろ  
 風折くともし火見する若葉哉  
 花散て今やつゝしのよしの山  
 澁柿にけふも暮行からす哉  
 薺の咲ほと咲てあれにけり  
 しらぬまにまはりし舟や夕霞  
 傘さしてけさも花見の幾群か  
 降うちに降出す音や五月雨  
 てゝら干す竿ひやくと秋の梅  
 大佛のはしら潛るや春の風  
 みしかよに敵の後を通りけり  
 秋の夜や母につかふる琵琶法師  
 大風のあとの月夜や鹿の聲

龜 我 友  
 吟 江  
 入 文  
 魯 帛  
 五 佛  
 生 波  
 魚 柳  
 二 鼠  
 一 羽  
 赤 山  
 雄 東  
 玉 道  
 見 柳  
 二 董  
 几 秀

俱馬寒

しほたれし我太布の暑かな 終中直  
 松一里歸路暑き日を荷ふ哉 かき 麥 水 生

四天王寺

未來記にありや彌生の時鳥 三 四

浪華眺望

若葉こし薨こしてや西の海 一 音  
 果なしや今朝となりても啼蛙 曉 臺  
 中くにしらてもよきに秋のくれ 樗 良  
 我ものに手折はさひし女郎花 東武蓼 太

ことし岡崎の春夏を訪ひて此二句をきく

濱道や砂の中より緑たつ 蝶 夢  
 三條へ出てこそ見たれ初茄子

ひかし山の秋なつかしく出て例のてふむ庵に立より  
 しに寒郷といへる題を探りて

何急く家そ燈ともす秋の暮 几 萱  
 折から浪花より文のはしに

霧雨に小室うたふは誰か馬 舊 國

澁柿や街道中へ枝をたれ 蝶夢

ちかき世の頃までともに風流をかたり合あるは席を  
同うせしも今はよになき人のたかみとなれる三ふし

四章をかひつけ侍る

降とのみおもひし春も一夜哉 移竹

おもひもの人にくれしよほとゝきす 太祇

耕に馬持し身の嬉しさよ 召波

我宿の春又やとや蜩の内 達布

はたとせはかりむかし

亡父か歳暮に

牛馬には師走のありて寶かな 几圭

於夜半亭兩陰三十六句

頭へやかけん裾へや古衾 燕村

霜に聲あり我床の下 几董

ふしゝけき竹を簀に組わひて

日頃の狸來すなりにけり 村



いさよひの心地更たり宵なから  
風ひやくと漕かへるふね  
織多村に續きて秋の帘  
施行のあとの箒塵取  
告子に才ある聲や撰らん  
三たひ迷へる歌の占かた  
燈盡を鐘鳴方へかたふけて  
此夜樂天江州の司馬  
隣から雪折竹を起しつゝ  
立小便の答へ高  
京橋や河内路かすむ昏の月  
花落鳥啼開帳の損  
とろゝ摺音春深く聞ゆなる  
山をはなれて坂にとりつく  
鍵持の疝氣いたはる草枕  
冬のひなたを見失ふたり  
古家のひつみ直しぬ兎角して



○はらつゝみうち  
ならして腹つ  
み打ならし  
て。  
○あそひかな遊  
ひ説。

○おとろ／＼お  
とろおとろ。  
○狸寝入り狸寝  
入り。

○とかく鬼かく  
ひくく響く。  
○よへーよべ。

## 一夜四噺發端

秋の日の晝よりくれて、いと雨さへしきりなれば、窓の燈かけもなつかしき、油小路なりける幽居を敲て、嵐山叟か病中をなくさめんと、百鬼夜行のあやしきをかたり出で、かの東坡居士の物好に倣はんとすれば、あるしの翁耳うちふたき、いかで四噺流行のおかしきにはとつふやきけるにそ、おのつから狐狸のふしともゆかしくて、萩に薄とわけまとへは、無爲は夕の秋をかこち、高子は舟なき旅を愁ひて、とみに膝押のはいかいとはなれり、やゝ半過行頃、おの／＼調へのおなしきをよろこひ、はらつゝみうちならして、無爲庵

### 秋のくれ泣を此日のあそひかな

さてあるしの翁は、このほとこのいたはり獨堪へくもあらで、おのれには句をゆるし得させよと、頭巾まふかに引かふり、おとろ／＼に毛おひたる古きしとねの、八疊には得ものへあへざるに這のほりつゝ、やかて臼引音の聞ゆるは、例の狸寝入りにはあらで、そこら喰ひこほしたるよひ茶小豆餅の狼籍なるも、うしろめたけれ、とかくして三更の鐘ひく頃ひ、四卷の歌仙なりぬ、袖にし歸りて、夜明るまゝに打かへし見るに、よへの小判に引かへて、柿の古葉の古くさきに似たれ

と、何とやらんむかしの人のかほりもあれば、橘屋とはかりあはせよと、あから  
さまに此邊と題して、橘仙堂に得させぬ。

花 洛 紫狐菴蕪村しるす

○あきの一秋の。

○かれて―枯て。

○きて伏す―來て  
伏す。

## 四歌仙 其一

薄見つ萩やなからん此邊り  
 風より起るあきの夕に  
 舟たえて宿とるのみの二日月  
 紀行の模様一步一變  
 貫之か娘おさなき頃なれや  
 半菰おもく雨のふれゝは  
 さよふけて弓弦鳴せる御なやみ  
 我もいそしの春秋をしる  
 汝にも頭巾着せうそ古火桶  
 愛せし蓮はかれてあとなき  
 小鳥來てやよ鶯のなつかしき  
 さかつきさせは逃る縣女  
 若き身の常陸介に補せられて  
 八重のさくらの落花一片  
 矢を負し男鹿きて伏す霞む夜に

燕村

良 董 村 山 董 良 村 董 山 村 良 嵐 几 樗  
 山 董 良

○校訂者曰、移徙  
！移徙力！

○松かえー松か枝

春もおくある月の山寺  
大瓶の酒はいつしか酢になりぬ  
五尺の劔うちおふせたり  
満仲の多田の移徙日和よき  
若葉か末に沖の白雲  
松かえは藤の紫咲のこり  
念佛申て死ぬはかり也  
我山に御幸のむかししのはれて  
逃たる鶴の待とかへらす  
錢なくて壁上に詩を題しけり  
灯を持出る女麗し  
黒髪にちら／＼かゝる夜の雪  
うたへに負けて所領迫るゝ  
日やけ田もことは稲の立伸し  
祭の膳を並へたる月  
小商人秋うれしさに飛歩き  
相傘せうと囀にたはれて

董村良董村良董村良董村良董村良董村良董村良

○またかりてーま  
たがりて。

いにしへも今もかはらぬ戀種や  
何物語そ秘めて見せさる  
象潟の花おもひやる夕間暮  
臘に志賀の山ほとゝぎす

良村山董

其二

白菊に置得たり露置得たり  
残そめぬるけさの月影  
借馬に秋を涼しくまたかりて  
濃酒ありと婦の申けり  
小暗きと明キと燭の二所  
手こねの香爐打ち守りつゝ  
かくて世に四位と成へき身なりしを  
野上の君か色にしつみぬ  
中垣の障子に蠅の二ツ三ツ  
ちかくも神のとゝろ鳴來ル  
よき僧を乗せてさりぬるつくしふね

嵐山

几良董  
樗良董  
蕪良董  
山董  
村董  
良董  
山董  
村董





○此ころ―此頃。

○山かけ―山陰。

○瀧りたる―瀧た  
る。○よきほと―よき  
程。  
○虫の選の―虫の  
選ひの。  
○ちくさ―千く  
さ。

此ころの雨後に晝みる月なれや  
 師の喪にこもる山かけの秋  
 喰ハはや百里屈し佛手柑を  
 掃除仕舞はうくひすの來ル  
 燈籠に火の残りたる朝霞  
 花不言春深き神  
 人老ぬ人又我を老と呼  
 泥に尾を引龜のやすさよ

良 村 董 良 村 山 良 董

## 其三

戀々として柳遠のく舟路かな  
 離々として又蝶を待艸  
 のとやかに菴ひとつを住捨て  
 芥のことき身そ寶なる  
 よきほとに夜はしつけき七日の月  
 虫の選の沙汰の近  
 古館秋のちくさに鎌いれて

凡 董  
 蕪 村  
 嵐 山  
 樗 良  
 董 山  
 山 村  
 村 良

## 集 部 七 村 燕

○官袴―單本一夜  
四歌仙に官袴と  
あり、七部集本  
の官袴委當なる  
が如し。  
○はなの白たへ―  
花の白妙。

○鳥部の―鳥部  
野。

高きのにほり物思ふ身の  
なさけなや戀路の鬼に追れつゝ  
たとき御經を手にも得取す  
風の今吹やみて初夜の鐘  
羽黒の鷹の磯へ落來る  
半弓のあまり強さに弛へ居て  
官袴の行儀打わすれけり  
垣越に麥めしくるゝ櫃なから  
梅の青葉にはなの白たへ  
秋風の筑紫に奈良の春の月  
ひとり香きく夜や霞むらん  
かけ引の中にもおもふ子の行衛  
名の惜しきさへかなしかりける  
鳥部のにかたみの衣も焼すてん  
良家の恩にほのめきし身は  
此頃の酒の齒にしむ旅そうき  
尾花かもとの石に火を打

董良村 董良山 村良 董村山 董良山 村良 董

○ひらき—開き。

山賊の月夜に塚をあはくらん  
 いつこや露の虎吼る聲  
 やことなきかたをいふせき我聞に  
 都の落首文に聞ゆる  
 米五斗芋三ッ四ッにとし暮て  
 老たる人の松明ともし行  
 淀鳥羽に牛の病のはやりつゝ  
 變化退治のあとの吊ひ  
 曉の北の御門をひらきけり  
 何のいそきそ雨の晴間に  
 おのれのみ花見男のあくかれて  
 たもとを染るはるの山風

村良 董村 良村 董村 良村 董村 良村 董村 良村 董村

#### 其四

花なから春のくるゝそたよりなき  
 やかて卯木の垣の山吹  
 摺鉢の獨活のあへ物召れけり

標良  
 嵐山  
 蕪村

既満ぬる連歌一折  
 煤竹に十三日の月さして  
 盥をねふる門口の牛  
 いるにうへし旅の御僧を速かへる  
 眞野の長者の齡かたふく  
 雨をみるために植たる櫛一本  
 畫具の皿に裾引て行  
 ふるされし身は中／＼に嬉しくて  
 忍はてしのふ宵の間の月  
 上加茂の水ひやゝかに打わたり  
 萩か中なる琵琶の音聞  
 白綾の袂うるみて見ゆる也  
 ことさら宇佐の神無月にて  
 さひしさや紅葉散たへて夕時雨  
 狐釣らんと出る芦の家  
 黍團子三日の糧と見へにけり  
 遊女を隠す畫のともし火

良村萱良村萱良山董村山良村萱良山几

萱

○耻しき—耻かし  
き。

○なり—也。

○銀—銀（左側に  
を引く、しろ  
がねと調する  
印なり）。

○送られよ—送ら  
れて。

○くれの街を水な  
かれ—暮の街を  
水流れ。

鍬立の手に耻しき戀衣  
ぬれつゝもとる猫のひんなき  
さらくと庭の木賊に風の音  
新聖靈の給仕するなり  
能住居秋の暑さのゆかしくて  
月を情の旅の宿かる  
世のうへの人のほたしもいとはれし  
頭はおもくて居ると答へよ  
銀の鉢にもちゐを送られよ  
長はしとの軒の長雨  
からたちに成りても花の匂ふ也  
母の剃り髪けふや祭らん  
啼鳥我もきのふの我ならす  
くれの街を水なかれ去る  
花に明々柳に鎖す柴の戸に  
主客の睡長閑也けり

安永癸巳九月發行

執村良董良村董良村董良村董良村董

筆

## 花 鳥 篇

○校訂者は、七部  
集本花鳥篇には  
花鳥篇なく、單本  
あり、茲にはこれ  
點のみに就て頭  
註するの煩を免  
け、終て單本花  
鳥篇に依り、調  
を附したり。  
○あらし山—あら  
しやま。  
○さうし—さ  
うんし。  
○草の扉—草扉。  
○春烟—春煙。  
○去—去。  
○いひ—云ひ。  
○吐—吐。  
○ち—こ、  
情。

郭文が勝負なければ、鬼貫が禁足にはくみしやすきにや、みよしの山ふみも、  
かりねのゆめにたどり、あらし山の春のゆくゑだにしらぬゑひすぐゑのいとさ  
うくしければ、せめて朝夕草の扉におとづるゝ人の、花さくらの吟詠をほくの  
はしにかいつけ、一帖にものして臥遊のよすがにもとおもひたちつゝ、とかくす  
るほどに春烟眼を過ぎ、緑樹窗を蒸ひ、荏苒として去つくす日にゆふべをかこ  
ち、蕭條とふりくらす雨に曉をしらず、おこたりがちな老の身をうらみて、ひ  
とり几上に肘する折ふし、ある人梅翁のたんざくを得て、この句にわきせよとい  
ひおこせたるを、取上げ見れば手澤淋漓として、雲外の一聲睡をさまし、言下に  
一句を吐、所謂狗尾をもて貂に繼たるこゝちするを、門下の二三子第三第四とつ  
まけゆくまゝに、やがて三十六句にみちぬ、いとよし花さくらの後へに附して、  
則花鳥篇と題號して、我疎懶の罪を謝すことしかり。

壬寅皐月

蕉村識

○大井川―大井  
河。よしの一よし  
野。  
○仕舞は―仕舞へ  
ば。

○咲―咲。  
さけ

○山さくら―山  
櫻。

○やま櫻―山ざく  
ら。  
○住家―住家。  
すみか。

○月のよ―月の  
夜。  
あけ。  
○明て―明て。  
あけ。

# 花 櫻 帖

浦里のさくら咲けり海苔の味  
花をとほと答ふ六十八九日  
花の瀬にうかむ筏や大井川  
葛城やこゝもよしのゝ雲ちぎれ  
けふぎりの垣を仕舞は落花哉  
暮おしむさくらにしばし三日の月  
初ざくらひそかに咲る風情哉  
さりながら腹はへりけり山さくら  
炭がまのけぶりも消てやま櫻  
我住家よしのゝ花に錢二百  
立よればことに一樹のさくら哉  
僧寺に歸る月夜の櫻かな  
つとに起て見れば花ちる麥畠  
月のよは花より明てさくら哉  
草臥た足でわたるや花の河

大石士  
浪花雄  
大和何  
大石佳  
胡  
宇治ダハラ野  
丹ミヤツ東  
ヤマト如  
大和守  
正  
湖  
ナニヘウ  
大石士

川山年来則柳菊渚景水明巴崑め喬

○哉—かな。

○櫻—さくら。

○胡蝶哉—こてふ  
かな。○行春や—ゆく春  
の。

○さくら—櫻。

○掃—はく。  
○聚哉—あな。

○異本より。

○初さくら—初  
櫻。○花のか—花の  
香。

○ねて—寝て。

舟さして花にとほしき細江哉  
 花を見て歸るうしろや朧月  
 米かしぐ水にとほしや山ざくら  
 掛茶屋の杓子で拂ふ櫻哉  
 花に添ていさゝか逝る胡蝶哉  
 花に掉さすや夕日の片だより  
 うつくしき花のさかりやきのふけふ  
 行春や逡巡として遅さくら  
 たのまれてさくら見に行男かな  
 ちればさく風情や雪の山さくら  
 掃庭に雨おもき花の零哉  
 いろ／＼の人見る花の山路かな  
 遅さくら廿日の月の木の間哉  
 ちると見し夢もひとゝせ初さくら  
 花のかやさくらに風のさはる時  
 花にねて月におどろく木陰哉  
 夜ざくらに梟を追ふ礫かな

我 熊 佳 吾 青 古 金 春 心 銀 小 管 几 松 雪 是  
 則 二 棠 琴 荷 好 ことの 篋 坡 頭 獅 女 鳥 董 化 居 岩



○吹さく吹きり。  
○樵夫さきり樵夫さきり。

○檻さほま檻さほま。

○櫻さくらかりさくら櫻さくら狩さくら。

○山さくらさくらさくら山さくら。

○咲さき吹きり。

○にさくらしさくら山さくら西さくら山さくら。  
○天さくら石さくら大さくら石さくら。  
○菊さくら十さくらのさくら石さくら。  
○土さくら巧さくらとさくら同さくら一さくらなるさくら。  
○をさくら示さくらすさくら也さくら。

鄙人の舅に俱してさくら哉 舞  
さくら咲中や樵夫か飯けぶり 宮山  
おもひ得ぬ人伴ひてさくら狩 維  
老て猶さくらは花にとはれける 柳  
夜ざくらや檻ちかき君が聲ソキノハマ桃  
溜池のうごかぬ水にさくら哉 附  
舟出して入日の前のさくらかな 大石曾  
狩くらす花の華を歩路哉 東  
櫻かりかの木この木の一構 まさ  
舟出して遠山さくら見付たり 吞  
雨の日やむかし良なる南良の花 徳  
きのふちりけふちりひちの山さくら 文  
雲と咲雪と散けり山ざくら 女石  
花に來て御室を出るや宵月夜 ナニハ百  
花の雲大和河内の夕けぶり 紫  
にし山や花の朧に日の落る 大石  
さくら陰誰に飡す山の神 菊  
十巧洞樓松皮野獅助雨鳳葉女駒呼關

○植うゑ植うゑ。

篇

鳥

花

○奥本ふせく。

○哉—かな。

○込—込。

○散かたの—散ちりが  
たの—ちり。

○上—上あけ。  
かな—哉。

ちりがてに人待がほのさくらかな  
花の浪すくひ上たる扇かな  
谷水へ手は届ずやさくら狩  
散かたの花見るうつり心かな  
ぬけ道やさくらちり込たまり水  
花もどり隣に風呂の有夜哉  
花さくやひたやごもりの僧がもと  
爐ふさひで見ればさくらは咲にけり  
白雲の根をおろしけりさくら苗  
垣こしに涼ひや及およか花を立て見る  
山おろし盃へ青葉や花の楯  
早鮒の晝にならぬや初ざくら  
試のさくら咲けり二三輪  
遠里の花静さよ午の貝  
良等の居所うれし花のもと  
さいつころ植しも見たり山ざくら  
慶子江子 巴子 雷子 雲子 之 五 之 尼 仙 伊 東 眠 自 三 和  
洲 兮 洲 來 瓦 獅 笑 角 流

兵 来 里 清 池  
屯 由 夫



○たゝ見ゝたゝ  
み。

花落花開猶未醉

還疑千日在君家

千日の酒賣はたぞ花の陰道立

十字街

花に酒汗して牛のひく日哉 蓼太

登台嶺

うへもなきこのよの櫻咲にけり 曉臺

右文晉の二句

一休會裏になき物

まな正月しも茶わむ

をしきたゝ見くものいゑ

勢にこめ得法悲の衣

つとめ放參經陀羅尼

はやるものなにく

猿樂田樂のうたひもの

尺八こきりこはふかふし

傾城若俗のさふたむ

○焦尾―蕉尾。

○起證―起請。

○その道を―その道理を。

さよ／＼さ夜ふけかたのよ

しかのひとこゑ

此小歌は天下老僧の活作也、佐竹の御家にありて  
 疎なる變には掛られすとかや、その一聲をこゝに  
 うつして、焦尾桐のしらべをけふ一曲の早歌もま

た艶なり。

右の文は其角か焦尾琴に有て、俳諧の一枚起證ともいふへし、さはおのれがこゝろざし、賤陋にして、寂しをりをもはらとせんよりは、壯麗に句をつくり出さむ人こそ、こゝろにくけれ、かの伏波將軍か老當益壯といへるぞ、よろつのみちにわたりて致を一にすべし、古市河栢筵今の中むら慶子などは、よくその道をわきまへしりて、とし／＼に優伎のはなやかなるは、まことに堪能の輩と云べし。

みやこに住給へる人は月花のをりにつけつゝよき事をも聞給んといとねたくて

燕村さまへ文のはしに申つかはし侍

いとよる物ならにくし風 大坂うめ

さそへはぬるむ水のかも河 其 答

○古幸一草。

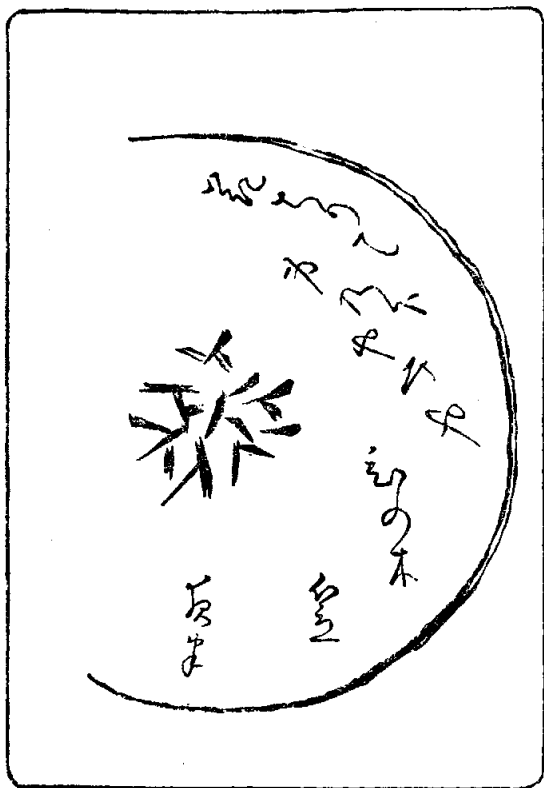
○校訂者曰。みや  
こに住云々連吟  
十二句は七部集  
原本に脱略せり。  
補ふ。より之を  
世。うきよーうき

盃にさくらの發句をわさくれて  
表うたかふ結むしろの裏  
ちかつきの隣に聲す夏の月  
をりくかほる南天の花  
中く朝精進の罪あさき  
重盛卿のいとまたびたり  
ゆく雲のもろこしかけて旅衣  
碇の總をちゝにわかぬる  
夜しはるを免す城下のほのめきて  
かゝるをりにや人はかしこき

## 下略

几董  
小いと  
夜半  
佳棠  
湖柳  
百池  
熊三  
是岩  
之兮  
魚赤

さくら見せうぞひの木笠と、よしのゝ旅にいそがれし風流はしたはず、家にのみありて、うきよのわざにくるしみ、そのことはとやせまし、この事はかくやあらんなど、かねて思ひはかりしことどもえはたさず、ついには煙霞花鳥に辜負するためしは、多く世のありさまなれど、今更我のみおろかなるやうにて、人に相見んおもてもあらぬこゝちす。



○聞<sup>きこ</sup>—<sup>きこ</sup>鹿。

○うへや—又や。

○逐<sup>おひ</sup>—逐<sup>おひ</sup>。○ゆく衛<sup>おひ</sup>—ゆく  
笛<sup>おひ</sup>なる。○際<sup>おひ</sup>—際<sup>おひ</sup>。

○見て—みて。

○くれなゐ—紅  
み。○我行<sup>おひ</sup>く—我行<sup>おひ</sup>く。

ほとゝきすいかに鬼神もたしかに聞  
 ましてやまぢかきゆふだちの雲  
 江を襟の山ふところに船よせて  
 うへや通辭の袖ひかへつゝ  
 藥種干す匂ひのこりて月夕  
 藏かとお見ゆる露の家造  
 荻萩のおどろきやすし西の京  
 變化逐うつ夜にみやびして  
 むらさきのさむるも夢のゆく衛哉  
 吳楚の際に雨うらむ雲  
 駑を枯野の末にこゝろ見て  
 飯をにきらは大いにすへし  
 聲たみて江湖頭の尊とさよ  
 柳はみとり花はくれなる  
 御車の軒端を蜂のうかゝひて  
 我行く春や戀せすて過

宗因

燕 几 百 佳 金 湖 湖 田 我 之 是 熊 正 維 吾  
 村 董 池 棠 篁 柳 崑 福 則 兮 岩 三 巴 駒 琴



○蜜—密。

○つぐ子—つく  
子へて集の花  
鳥窟にて満點を  
附したるは此の  
一字なり。單本  
花鳥窟は此字に  
満點なし。

○まめの粉の指。

○こんちり—だん  
ちり  
○のほられた—の  
ほられて。

みこもりに影沈たる臘月  
古の林の夜落る枝  
顯蜜の僧なりし身を武者修行  
麥さへ喰へは泊ておく村  
さみたれにひよんなしはるを買て來て  
うしや鏡の蓋を踏割る  
遠く見てかり寐の貝を愛スらん  
ト部の家をつぐ子也けり  
まめの粉の指あやまてる小豆餅  
そとは見せしときぬかけ置  
秋出たる狀を師走に投込て  
三番船の鯛のすて賣  
はらくとあられの中に朝の月  
うれしや蘂を焚仕廻たり  
藍瓶へ肩の手拭落かゝり  
ことしは多いたんちりの數  
宗因もきのふ江戸からのほられた

燕松春魚百、燕老雪几春佳自銀紫管月  
村化坡赤池 村雨居董坡棠笑獅洞鳥居

長 雪 隠 も よ い ほ と か 有  
 俯 あ ふ く さ く ら の 木 末 花 の も と  
 た し か に 聞 ヲ と き し の 二 聲

宰 道 吞

町 立 獅



○桃李序—安永元年版單行本には「俳諧桃李序」とあり。

## 桃李序

○哥仙あり—原本可仙有。  
○一人—壹人。  
○木にゑらんといふ—木にゑらすと云。

○此歌仙—この可仙。  
○けふの俳諧にしていけふはけふのはいかにし。

いつのほとにか有けん、四時四まきの哥仙あり、春秋はうせぬ、夏多はのこりぬ、一人請て木にゑらんといふ、壹人制して曰、此哥仙ありてや、年月を経たり、おそらくは流行におくれたらん、余笑て曰、夫俳諧の活達なるや、實に流行有て實に流行なし、たとは、一円郭に添て、人を追ふて走るかことし、先ンするもの却て後れたるものを追ふに似たり、流行の先後何を以てわかつへけむや、た、日々にこれか胸懷をうつし出て、けふの俳諧にして翌は又あすの俳諧也、題しても、すも、と云へ、めくりよめともはしなし、是此集の大意なり。

燕村識

○かけ影。

○らんらむ。

○としふりし一年  
ふりし。

○作者名、董。

○また聲の—まだ  
聲の。

○忍ふ—しのふ。

牡丹散て打かさなりぬ二三片  
卯月廿日のあり明のかけ  
すはぶきて翁や門をひらくらん  
聲のえらひに來つるへんぐゑ  
としふりし街の榎斧入て  
百里の陸地とまりさためす  
歌枕瘡落たるきのふけふ  
山田の小田の早稻を刈比  
夕月に後れて渡る四十雀  
秋をうれひてひとり戸に倚  
目ふたいて苦き藥をすゝりける  
當麻へもとす風呂敷に文  
隣にてまた聲のする油うり  
三尺つもる雪のたそかれ  
餌にうゆる狼うちに忍ふらん  
兎唇の妻のたゝ泣になく

燕  
村

几  
董

村

董

村

董

村

董

村

董

村

○はるの―春の。  
にしに―西に。

○暖  
暖ナハデ

○よのいそき―世  
のいそき。

鐘鐺ある花のみてらに髪きりて  
はるのゆく衛のにしにかたふく  
能登との、弦音かすむ遠かたに  
博士ひそみてときを占ふ  
栗眞し馬倒れぬと鳥啼て  
樗チ咲散る暖ナハデ八町  
立あへぬ虹に淺間のうちけふり  
勅使の御宿申うれしさ  
江に獲たるアサチ魚の腹赤き  
日はさしたるから又あられ降  
見し戀の兒ねり出よ堂供養也  
つふりにさはる人にくき  
十六夜の暗きひまさへよのいそき  
しころ打なる番場松本  
駕昇の棒組足らぬ秋の雨  
鳶も鴉もあちらむき居る  
崇タカなす田中の小社神さひて

董村董董村董村董村董村董村董村董村董村董



○我脚の月に—我  
歩の月に—

○いはら—いは  
ら。

出船つれなや追風吹秋  
月落て氣比の山もと露闇き  
鹿の來て臥す我艸の戸に  
文机の花打拂ふ維摩經  
頭痛をしのふ遅き日の影  
鄙人の妻にとられ行旅の春  
水に残りし酒屋一けん  
荒神の棚に夜明の鶏啼て  
歳暮の飛脚物とらせやる  
保昌（いほむね）か任もなかばや過ぬらん  
いはら花白し山吹の後  
むら雨の垣穂とび越スあまかへる  
三つに疊んて投ふるさむしろ  
西國の手形うけ取小日のくれ  
貧しき葬の足はやに行  
片側は野川流るゝ秋の風  
月の夜ころの遠きいなつま

村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董 村董



仰き見て人なき車冷しき  
 相圖の礫今やうつらし  
 添ふしにあすらか眠うかゝひつ  
 甕きどの花阿修羅のひらくくとちる  
 根繼する屋かけの壁の下萌に  
 巣つくる蜂の子をいのり呼

安永九庚子冬霜月

村 董 村 董

## 續あけからす

○混し——七部集

○混して

○を考——七部集

○蘭老

○單行本——七部集  
共に附に作る○七部集既にノに  
を加ふ

崑岡玉採之有餘、いつみの袖しけき宮木は、ひくともたゆることなしと、風雲の吟猶かくのこくとく、花の春月の秋おりにふれことにのそみて、むなくすくしかたきこゝろより、風に欺き鳥を憐む。其情そのすかた、やまと唐土のうた、我筑羽の一體に及ふまでもかはらざるをや。ひと日客來りて俳諧の虚實を論するのつゐて、世に詩哥の虚實あるは花實配當など、ひとつに混してとくものありといふ。おもはざるの甚しき周子か虚實は境趣をのへ、紀氏か花實は心詞をいふか。支考か所謂はいかいの虚實は我いまたしらす、後鳥羽の上皇の勅問に、定家の卿の答させ給へる、花山の僧正か哥のまことすくなき、其誠すくなきか哥也とかや。向上の一路こゝろわきかたし。しかはあれと詩や哥や、聲の教にして教戒の端といへれば、此境に遊はんこそ風雅正第一善蹄とやいはむか。李白か白髪三千丈といひ、素性か血の涙落てそ瀧津白河はといへるたくひなるへくや。たとへは酒に酔るものゝ道路幾筋にも見え、燭のみつにもふたつにも見ゆるかことき、酔中の誠とやいふへき憂にせまり喜にたへすしてはしかならんかし。客またいふ、蕉翁の正調は俗談平話にありと。そも風流の一體なるを俗談平話にありとはいかにそや。既白氏も白俗の名あり老妻

畫紙成「楮句」といひ、神垣にくちなし色の衣きてもみちにましるなど、撰集のうた老杜といへとも後世卑俗のそしりまぬかれず。雅中に俗あり俗中に雅あり、詞の雅俗ことの雅俗あることを思ふべくや。又翁の句に枯枝に鳥のとまりけりといふを難して、無味淡泊なりといふものありと。海を語り氷を語るは其人によるへし、富士の高根に雪かふるとは襦袢の孩兒もいふことを得へし。鸚鵡啄餘香稻粒とあらは何の感もあるまし。一句の精神一二字の字眼あることをしらすや。前村深雪裏昨夜一枝開、ものゝふのやなみつくらふ小手のうへに霰たはしるなとて推しるへきか。こゝに我友几童、さきに明からず集をにらひて、諧哥の流行變化を論す。そも流行變化とは氣運に隨ひて遞遷するをいふか。今や蕉翁の教化人々たりとするも、また氣運のしからしむるか。今はた其續集をにらひてこれか序あらんことをもとむ。其撰することのかたき裁するよりも、かたし。鴛鴦は可縫金針難度とやいはん。其句々はみな鄧林の良材いせの海清き渚の玉をにらふ。其撰るおりにふれ乞ふにまかせいなみのゝいなみかたく、はゝかりの關の名もはゝからず、來客にこたふことはをもてこれか序とすといふ。

丙申の秋

平安 阮道立誌

## 續明鳥集

## 春之部

名の高き遊女聞へす御代の春  
 大雪のもの静さや明の春  
 目を明て聞て居る也四方の春  
 宋 几 太 祇 圭 阿

## 等持院寓居

元日や艸の戸こしの麥畠 召  
 元日や鶯もなかくてしつか也 浪速 柳  
 春なれて二日の門の樂しけれ 伏水  
 二日たつ春や禮者の酒きけむ 龜  
 宿直して迎へ侍りぬ君か春 月  
 海老のつらにいせの初日や門かさり 白  
 小男に似あはぬ春の羽織哉 美  
 年禮にすこしの野路氣はれたり 名古屋子  
 東 角 砧 居 郷 女 國 波

## 離落

鶯のあちこちとするや小家かち  
うくひすや障子に透る春の色  
うくひすや門掃人の朝きけん  
鶯の初ねや高雄むめか烟  
うくひすの卯の時あめに高ね哉  
鶯にしのお番衣の立居かな  
萬 容 村  
乙 總 立 董 太

長安春色

いかのほり都の空の曇かな  
とちらへもはしる麗や几巾  
里坊に兒やおはしていかのほり  
耕や鳥さへ啼ぬ山かけに  
耕や世を捨人の軒端迄  
古くさき梅の蒔繪や高臺寺  
いはら野や乏しき梅のあり所  
梅の花あたら苔の開きけり  
折とらは憂人出ん垣のんめ  
火ともせはうら梅かちに見ゆる也  
燕 東  
霞 鼠 波 村 魯 山 竹 移 嵐 大 燕 召 一 同  
曉 布 定 雅 舟 臺

## 即心即佛

いふて見よ口に酔を持梅花  
院くの梅ほころひぬ大般若  
此比やむめ咲ほとこの日の力  
暮るゝ日や庭の隅より梅の影  
樗 良 喬 湖 主

## 畫讚

夜半の梅清女か局敵きけり  
梅かゝや必人の來るあらん  
八ツ晴に柳か青ふなりにけり  
青柳やおもふにけさの長短  
つくく雨の柳を見る日かな  
若柳枝そらさまにみとり哉  
何となく二月になりし柳哉  
わりなしや海苔に纏るうつせ貝  
家遠し海苔干す女何諷ふ  
白魚に思へはからき潮かな  
かしましく啼て寂しき蛙かな  
同 志 慶  
ナニハ梅 浪速正 百 池  
キ 乙 柳 兒 董  
移 二 竹 柳 兒 董  
花 羅 川 竹 柳 兒 董  
同 志 慶

あ　と　へ　飛　心　は　持　ぬ　か　は　つ　哉　同見  
 啼　蛙　神　も　は　し　め　て　鳴　ル　夜　哉　伏水賀  
 橘　の　實　は　猶　照　り　て　餘　寒　か　な　伊井福  
 松　風　も　春　の　も　の　と　て　暖　に　同文  
 裏　町　や　聲　見　失　ふ　田　に　し　賣　名古屋五  
 小　晝　時　霞　か　中　の　鶏　の　聲　同白  
 山　も　と　や　歸　ら　ん　と　す　れ　は　夕　霞  
 奈良にとまりて

町　あ　り　く　鹿　の　背　高　し　臚　月　雷　夫  
 一　條　と　二　條　の　間　や　お　ほ　ろ　月　優　才  
 春　の　夜　も　傾　く　月　や　連　歌　町　召　波  
 夜　を　春　に　伏　見　の　芝　居　と　も　し　け　り　田　福  
 芝　居　出　て　吹　る　ゝ　人　や　春　の　風　季　遊  
 裁　賣　の　來　ぬ　を　恨　み　や　春　の　雨　キ　董  
 春　の　水　草　臥　あ　し　て　わ　た　り　け　り　百　池  
 魚　ふ　た　つ　試　み　か　ほ　や　春　の　水　菊　尹  
 我　庭　に　あ　ら　は　や　と　思　ふ　春　の　水　春　蛙

春の野や水より續く里の數  
 春深し松の花もる城の堀  
 清瀧や夕月かけて小鮎とふ  
 茶はつまて身を宇治川の小鮎汲  
 枕にもならふもの也春の水

人の失語は咎すともあれな

大石家足  
 伏水車 蟻  
 浪速弄 我  
 同芙蓉花  
 無腸

春日晩望

日は落て増かとそ見ゆる春の水  
 梅おほろなる野はつれの家  
 田螺賣ル童か翁焼火して  
 小瓶の酒の雫つれなき  
 北風に秋を催す夜半の月  
 蚯蚓音を鳴く門のせうらき  
 駕舁にしろかねくれて待せ置  
 甥のとの世を捨んとは若氣哉

几董  
 万容  
 白砧  
 龜郷  
 九湖  
 竹裡  
 路曳  
 春蛙  
 左繡



湖 容 砧 郷 萱 瓢 優 嵐 石 雷 曳 裡 繡 蛙 容 砧 郷  
 ま 神 谷 の 宿 に 一 夜 あ か し て  
 卅 日 わ ひ し き 社 司 の 冬 さ れ  
 傳 へ 來 し 平 氏 の 公 の 太 刀 鎧  
 道 集 に 洩 た る 哥 惜 む ら し  
 出 か は り の 名 殘 も 月 の 薄 曇  
 輒 に 窪 ム 立 賣 の 町  
 時 人 に 詔 ひ か さ る 臺 の 物  
 暮 酔 ふ て 下 部 の 双 拔 け ん  
 鳥 狩 も 世 わ た る 種 の 醫 師 に て  
 よ そ に 憂 こ と に 年 子 産 ム 妻  
 籬 あ れ た る 朝 顔 の 枕 上 月

子 才 甲 友 夫

里に出て糧乞ふ露の身なりけり  
 車迎へて院に召るる  
 夜はいと汗もしとに臘らん  
 梳らぬ髪の毛にかゝれる  
 しくれ来る二階の下の夕風  
 木賃ねきりて風呂いそく也  
 淨るりを美濃商人の聲たみて  
 糊の力をたのむ山きぬ  
 いかめじく烏帽子着て出る花の時  
 春蘭はるらんに鯛のやきもの  
 董 夫 湖 才 裡 曳 砧 容 夫  
 の

二月十四日とみのもふけ事して  
 長閑さは障子のそなたこなた哉  
 盥の水の日にぬるむ影  
 竹輿たてる榎か本の藤咲て  
 とひろくといふ名さへおかしき  
 月の爲にうかれて人や呼ふらん  
 同 月 同 キ 董  
 居

獵船見へぬ濱の秋風  
 芒刈て假りに安置す彌陀如來  
 國司の情哥に聞ゆる  
 起臥も娘なくせし涙にて  
 祭の車門過る也  
 わか楓見こす旭のうつくしき  
 晝工をとめてけふも去ナさす  
 麥飯に老のむら氣の茶の湯して  
 遠き井を汲月の黄昏  
 垣間見し小姓を露の物思ひ  
 永き暇の御恩身にしむ  
 花曇あゆみ勞るゝはかり也  
 雉子ほろくと泊瀬の山越  
 況こゝろの僧に逢たり春の暮  
 馬塊の哀れ語るひんなさ  
 浅ましと伽羅をいろりに打くへて  
 アと叫ひつゝ狐さるらん

月 同 キ 同 月 同 キ 月 同 キ 月 同 キ 月 同 キ 月 同 キ 月 同 キ

|   |   |   |   |   |   |   |    |   |
|---|---|---|---|---|---|---|----|---|
| 鰯 | 我 | 櫻 | 燭 | 雲 | 十 | 冷 | 一  | 曉 |
| 口 | 寺 | 陰 | 剪 | す | に | 酒 | 人  | は |
| の | の | 小 | て | こ | た | を | の  | こ |
| 音 | 鐘 | 町 | 獨 | し | ら | あ | 母  | と |
| 暮 | と | か | り | 摩 | り | ら | 持  | に |
| る | 思 | 嬢 | 更 | 爺 | か | ぬ | 候  | 尊 |
| ゝ | は | の | ゆ | か | 高 | 器 | から | き |
| ま | す | 名 | く | 根 | 根 | に | ら  | 提 |
| て | 夕 | を | 窓 | に | は | 誰 | き  | 婆 |
| 春 | か | と | の | は | れ | も | 世  | 品 |
| 日 | か | は | 下 | か | か | 悦 | に  |   |
| か | す | ん | 集 | ゝ | し | ふ |    |   |
| な | み | 枕 |   | も | 暮 | ま |    |   |
| 松 |   |   |   | も | て | し |    |   |
| 任 |   |   |   | キ | 同 | 同 | 同  | 同 |
| 白 | 蝶 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同  | 同 |
|   | 夢 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同  | 同 |
| 鳥 |   |   |   |   |   |   |    |   |

春行

古 草 に 陽 炎 を 踏 山 路 か な 大  
 あ た し 野 に 春 も 更 行 土 筆 哉 浪 瀧 白  
 焼 寺 も 春 來 て 萩 の わ か 葉 哉 キ 董 堂  
 は し ち か く 涅槃 かけ た る 野 寺 か な 敷 馬 浦 附 鳳  
 ね は ん 會 や 上 野 の 鐘 の 市 に 入 浪 瀧 守 一  
 網 入 め 海 の 風 見 る 彼 岸 哉 出 石 霞 夫  
 十 は か り 班 女 か 閨 の 蠶 か な 浪 華 龜 友  
 傾 城 も 廓 邊 り の す み れ 哉 竹 裡  
 火 の た へ て 鼠 の は し る 焼 野 哉 出 石 長 圃  
 わ り な し や 瘦 て 餌 運 ふ 親 雀 伏 水 御 風  
 窓 の 月 戀 す る 猫 の 影 ほ う し 石 友  
 轉 ひ 落 し 音 し て 止 み ぬ 猫 の 戀 キ 董

重三

家 く や 雛 と し も な く 小 豆 飯 移 竹  
 初 雛 や 老 の 後 な る 娘 の 子 左 繡  
 出 代 や 燈 は あ り な か ら 手 暗 り 眉 山

出かはりや朝めし居る胸ふくれ 太 祇

浪花より京に出るとて伏見桃山に眺望す

漕れ來し舟かへる見ユ桃のひま 一 晉  
背戸門のわからぬ家やもゝの花 半 化

感 偶

咲をさへ驚くに散初さくら 几 董

又ことし待人にちる櫻かな 大石士 川

出て見れは夜も散なる櫻哉 吞 溟

夜櫻や従者つれたる芝居もの 伏水雨 谷

三線に散も櫻の夕かな 浪速老 山

さくらかけ出れは暮のうき世哉 出石馬 鱗

うき旅の我にはおかし櫻とき 月 居

陰に寝て寝ぬ夜也けり山櫻 浪速殘 夢

櫻く散て佳人の夢に入 無 腸

はしめてよし野の山踏せし時

二日見ていかさま花のよし野山 几 董  
芳野よく見つれと花のあらし山 一 晉

あらし山おもふ日花に後れたり  
山さくら丹波の風はまた寒し  
兒つれて花見にまかり帽子哉  
花を見る人の袂に墨付ん  
慰にうき世捨はや花の山  
暮春  
嵐 甲 雅 因 太 祇 竹 律 風 移 移 竹 律

花なから春のくるゝそたよりなき  
仁和寺の邊りにくるゝ春もあらん  
行春や撰者をうらむ哥の主  
ゆく春は麥にかくれてしまひけり  
惜しや春旅せて過し我は猶  
國の戸に鎖をろす春のなこり哉  
うら垣やしらすれ李日や倦る  
丹波市といふ所の酒店にやすらひて  
樗 良 我 則 村 蘿 喬 水 麥 几 水  
ハリーマ 青 燕 我 則 村 蘿 喬 水 麥 几 水

こちら向ヶ海老賣女藤白し  
藤棚や酒賣家のとはれ貌  
花白き躑躅や蝶の色かろし  
正 白 董 笑  
自 笑 董 正 白 董 笑

つゝし咲ぬ土に乏しき岩の間  
 菜の花に雨の近づくにほひ哉  
 菜の花やよし野下り来る向ふ山  
 大石集  
 巧馬  
 太祇

## 春興廿六句

菜の花や月は東に日は西に  
 燕村  
 山もと遠く驚かすみ行  
 楊良  
 董  
 涉し舟酒債貧しく春くれて  
 几  
 御國かへとはあらぬそらこと  
 村  
 脇差をこしらへたれははや倦し  
 良  
 董  
 義着て出る雪の明ほの  
 董  
 仁和寺を小松の里と誰かいふ  
 村  
 戀しき人の馬繫きたり  
 良  
 董  
 茸わたす菖蒲か軒をしのふらん  
 村  
 雨にもならずやかて燈ともす  
 董  
 尺八の稽古くると並ひ居て  
 良  
 賊とらへよと公の觸  
 董



早 稻 刈 て 晩 稻 も 得 た る 心 也  
 天 氣 の 續 く あ ふ み 路 の 秋  
 門 前 の 舟 と き 出 す 月 の 昏  
 弟 子 の 僧 都 は よ き 衣 着 て  
 花 の 中 家 中 の 衆 に 行 あ ひ ぬ  
 歌 舞 妓 の ま ね の は や る 此 春  
 永 き 日 や 蒔 繪 の 調 度 い と は し き  
 御 法 の 道 に 心 よ せ つ  
 古 郷 の 妻 に 文 か く さ よ ふ け て  
 若 大 將 に 頼 ま れ し 身 の  
 酒 一 斗 牡 丹 の 園 に そ ゝ き け り  
 日 は 赫 奕 と 佳 墨 を 摺 ル  
 翌 は は や 普 陀 落 山 を 立 出 ん  
 豆 腐 に 飽 て 喰 ふ も の な く

良 村 董 良 村 董 良 村 董 良 村 董 良 村 董 良 村 董

## 續明からす

## 夏之部

郭公待や都の空たのめ燕村

ほととぎす山は女松の景色哉名古麗士朗  
山寺や門を出てゆく子規イセ坡仄

長安萬戸子規一聲

ほととぎす南さかりに鄙曇ひた曇り曉臺

詩仙堂の邊にて

ほととぎす鴨河越ぬ恨かな几董物かたき老の化粧や更衣太祇あらためた手は膝に有更衣可重花守のけふ申上るほたん哉正名ねたまるゝ人の園生の牡丹哉キ董園ふりてよもきか中の牡丹かな士川花過て若葉に安き軒端哉復速奴魚

卯花の満たり月は廿日頃  
 卯花に山鶯の聲かな  
 おほかたに樹々の名しるき若葉哉  
 若葉山國にめてたき一つかな  
 夏の山たゞ峰まろく成にけり  
 あなかまと青梅ぬすむきぬの音  
 孤峰  
 無  
 居  
 雲  
 音  
 六  
 馬  
 腸

夏山や登りて向ふ峯ひとつ  
 うれしさは我丈過しあかさ哉  
 常にうき隣越す茨花最中  
 碁を崩す音幽也夏木立  
 かんことりあすはひの木の枝に啼  
 おほろ月も闇とかはりて短夜や  
 短夜や朝めし出来て物しつか  
 短夜や淀の御茶屋の朝日影  
 みしかよの香をなつかしみ一夜莖  
 道  
 立  
 足  
 閑  
 山  
 柳  
 駒  
 吟  
 山  
 葦  
 二  
 嵐  
 舞  
 家  
 道  
 維  
 斗  
 雄  
 キ

不樂間浮提濁惡世

此里の住居いふせし 麥埃 蝶 夢  
 麥うたや誰とあかしてねむた聲 移 竹  
 わかたけや橋本の遊女ありやなし 蕪 村  
 若竹は月にやしなふ景色哉 曉 臺  
 簀にうつす桑の中より蝸牛 霞 夫  
 てゝむしや蛙の後の雨つゝき 伏 水 山 肆  
 花鳥もきのふと過てはつ鱉 芙蓉花

## 旅行

蚊やり火やよき宿を取後れたり 路 曳  
 暗りへうかと這入はかやりかな 普 立  
 かやり火の蚊に連出るあるし哉 管 鳥  
 蚊遣火や勤はしまる國分寺 眞 五  
 脊戸へ出レは門へ出レは蚊の鳴音哉 正 名  
 正 名

## 端午

誰か子そ太刀よく似合菖の日 大 魯  
 あやめ葺て往來の人を詠けり 乙 總  
 海近き榎か下の幟かな 南 雅

とく時の心安さよ笹ちまきナニハ袖  
 月出て手繩もつるゝ鵜舟哉同 鳴鳳  
 飢鵜きうの篝かき消ス早瀬哉同 李康  
 上手ほと罪恐しき鵜繩かな 多  
 川風や鵜繩繕ふ小手の上に キ 董少

住吉御田植

早乙女やこれらも神の遣はしめ伊丹東 瓦  
 早乙女や朝澄ム小田の水鏡 瓢子  
 ことくく小雨をふくむ杜鵑花哉 志 慶

夕殿螢飛思悄然

あるしなき几帳にとまる螢かな キ 董  
 あさましや晝の螢の寢もやらす 月 溪  
 軒遠く手をはなれたる螢哉 李 溪  
 竹むらや降出し雨にとふ螢 車 蟻  
 玉あらは玉洗ひたき清水かな 江 涯  
 立去れは岩にかくるゝ清水哉 士 喬  
 後から馬の面出すしみつ哉 一 鼠

## 白骨觀

夏瘦の我骨探る寢覺かな  
 みとり子の墨かひ付しさらし哉  
 蠅うつていさゝか穢す團かな  
 うき人の日影をかさす扇哉  
 扇かへて君かあた書見るのみそ

白 士 几 同 蓼  
 砧 巧 董 太

## 夏日の長きを愛して對酌の即興

おもふほと風なき君か團かな  
 へたてゝ語るうすものゝ帳  
 木立ふる月半輪に傾きて  
 そなた下りに雁わたる也  
 暮の秋愛する瓢からひたり  
 貧を飄ふて獨り座し居る  
 獲して家路にかへる夷とも  
 雪や降へき嵐なるらむ  
 いつとなく沙汰も止みたる彗星

キ 池 キ キ 同 池 同 キ 百  
 キ 董 池

無縁寺といふ寺の建けり  
 御忍ひの乗物見ゆるきのふけふ  
 二度の返哥に心置くゝ  
 ひそみ住世は葬の花の陰  
 晦あたるの月ありやなし  
 狼の旅人なやます秋更て  
 弓矢をたしむ古き宮守  
 花咲て庭の紅梅うつろへり  
 奥ある春の曇ならまし  
 遅キ日を頭重しとかこちける  
 身は便なき室のうきふし  
 別路の酒に兜のゆるくらん  
 燭をてらして燃す一卷  
 夜は既明かた近き坊の窓  
 慈悲心と啼鳥やなつかし  
 藥艸に親の親をも尉つ  
 高札たてゝ稻を施し

池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ 池キ

堀池の水まく門の夕月に  
 棺を送る挑灯の露に  
 黒髪を無下に曲けたるにほひなき  
 温泉の舎に戀をしつゝも  
 限ある日數も積るみしか夜や  
 事清めたる鍛冶か注連縄  
 按察使は才ある人と聞はつる  
 利根に入間に雪解の水  
 山つらく暮ゆく花のおほろ也  
 書屋に惜しむ客中の春  
 筆同キ同池同キ池

我宿は下手の建たる暑かな  
 肌隠す女の罪のあつさ哉  
 あら暑し油しめ木の叫音  
 暑キ日に飽し茄子の糞物哉  
 ぬしのない膳あけてゆく暑かな  
 河合森にて  
 江田 田 福  
 伏木 吳 郷 女  
 定 雅 圭



こほくとなる神遠し蟬の聲  
夏川や流るゝものゝうつくしき  
川風に烏帽子かゝへて御袂哉  
筆のもの忌日なからや虫拂  
飽足らぬ女こゝろや土用干  
施米する日を違へすやとこの僧

納涼

涼しさや晝見し門に月の影  
夜涼や念佛申て居るもあり  
うかくと南草に酔や朝涼  
涼しさやよき碁に勝て肱枕  
すゝしさや旅に出る日の朝朗  
夕立や草葉を掴むむら雀  
ゆふたちの露の間またて照日かな  
夕立や下京は艸の露もなし  
白雨や膳最中の大書院  
ゆふたちに跡かたもなし雲の峰

出

石左

美角 召波 雨谷 楊良 燕村 道立 附鳳 太祇 正白  
几董 宋阿 既白 召波 鷺喬 自笑

土さへわるゝ暑き日に

龍の落し畑見に行や雲峰  
 涌かへる田毎の水や雲のみね  
 雨遠し入日に向ふ雲峯  
 雲の峰高觀音をはなれたり  
 と聞へけるに對して  
 八田氏龜  
 我則友

しつかさや湖水にうつる雲峰  
 森ある方に聲遠き蟬  
 乗物の鸚鵡に餌をや與ふらん  
 くすしの刀さす隙もなし  
 適く一夜を雨の月見して  
 踊る鱸を調す舟はた  
 おしてや難波の相撲弓とりて  
 夏は度々着かへるかよし  
 貴人の消るはかりに孕みつゝ  
 けふは横川の返事聞へむ  
 雨となり風となりたる雲いつこ  
 東魯東魯東魯東魯東魯東魯  
 魯董東  
 魯董東

珠數かけ鳩の松に來て鳴  
 柴の戸も百日あまり住なれて  
 我身の春の遅き明ほの  
 怠らす佛に花を奉り  
 むかしあた名の蝶を憐む  
 戀せしと思ひし日より御所の月  
 ならず扇にかよふ秋風  
 露重くゆふへの小萩ちりにけり  
 隣わひしき雪隱の壁  
 兄弟か國を出たる其後は  
 三年ふりゆく老の寒<sup>あはれ</sup>  
 史記講す博士に酒を勸ム也  
 かゝけて廻る雨のともし火  
 さよ中に一聲鳶のあやしけれ  
 紺屋か脊戸の桃の茂葉  
 此頃の日さへせはしき節句前  
 只よそなから娘見せ置

魯 東 董 魯 東 董 魯 東 董 魯 東 董 魯 東 董 魯 東 董 魯 東 董 魯

捨かての國こくにわも人のあいしらひ  
 宗旨の僧に月の宿かす  
 芋喰ふていもの狂哥を詠れたり  
 村の祭の道造り居る  
 いく世經て形おかしき行基焼  
 物好ミめす君か明くれ  
 醉其角花見の庭に侍坐すらん  
 一斗百篇英雄の春  
 執魯董東魯董東董  
 筆

今はむかしひと日几圭老人とゝもに嵯峨野に分入つ  
 雅因亭に遊び侍るに終日玄を談して漸暮に及びぬ  
 あるしは例の客を愛して野にたもとをりさすかに袖  
 の花のにはひも昔しのはしきに堂上いまた燈もとら  
 ていとおほつかなくも只ふたりのみ向ひ居たるに山  
 ほとゝきすしぱく過て三つよつふたつ螢の飛こふ  
 なと見すてかたくやありけん。

涼しさや闇の野つらも詠られ  
 几圭



起臥しけくかゝるゝ黒髪  
 白妙の巫殿に物申  
 かへり花咲井手の山吹  
 冬は猶鵲の尾のいそかはし  
 手人ましりに藏普請して  
 月隴よれや妻の酒渡ん  
 はしめて得たる一寸の鮎  
 仁和寺の櫻はまたし花の嵯峨  
 雛まつれる田家やさしき  
 宿かりていつこに鑑隠すへき  
 路に後れし妹や腦る  
 下路

同 柳 同 董 同 柳 同 董 同 柳 同

續あけ鳥

秋之部

闇となりて猶おもしろや星の空  
 笹の葉の露にも星の一夜哉  
 君見よや只一筋にあまの河  
 たらちねを夫婦と見るやほし祭  
 はし立や曉かけて天の川  
 いもの葉の露や銀河のこほれ水  
 見へそめて今宵になれり天の河  
 露の間をめてたき星の契哉  
 ほし合のそれにはあらしよはひ星  
 船に寝て古郷百里あまの河  
 鵲の長柄もかけよほし一夜  
 淨凡焚香のつとめは誰もすなるゆふへ例のくるはし  
 うてやみぬるそいとむくつけきや

道立 友容 万の 志慶 自笑 驚喬 龜郷 左繡 白砧 大魯

八田氏龜

梶の葉に視はつかし墨の糞  
あさかほかまいりて星の別設  
よみ哥をひそかに星の手向哉

無腸  
二柳  
几董

六日も常の夜には非すと口すさみつゝ美角定雅の二  
子を訪へは

六日たつ秋のこゝろやほし祭  
うすき影踏ム月の宵過  
車押廣野へ薄かき分て  
借もて佩る太刀の重たき  
餅買ふて酒のむ人をわらふ也  
雨を見あはす市のかたはら  
よこさまに轉んておはす石佛  
服きぬのきぬの血に汚つゝ  
憂事の敷くせまる筆とりて  
あり明の灯のもゆる土器  
しみく<sup>く</sup>と竹に時雨の音す也

美角  
キ董  
定角  
キ角  
キ角  
定角  
キ角  
同角  
同角  
同角



定角  $\neq$  定角  $\neq$   $\neq$  角定  $\neq$  角定  $\neq$  角定同  $\neq$

## 遊相國寺

後れては舟の入來る初汐に  
 秋うそ寒き旅の水風呂に  
 ひたるさを女なる身のしのひ居て  
 御能三番時うつりけり  
 蠟燭の風に流るゝ夜の花  
 聲なき蝶のねはくれて飛  
 春の野に乞食僧の連哥聞  
 他の國なる伯夷叔齊

筆キ定角キ定角キ

花なから秋となりけり池の蓮  
 筆簾聞ゆ風のひやゝか  
 月の夜にわかき人ゝ宿直して  
 せうしの間に風かくるゝ  
 地黄蓑る酒の匂ひのしたゝるし  
 曇れはいとゝ暮安き冬  
 一群に一向宗の京のほり

大几同大几同大几同

董魯

住 荒し傾城町の夕日影  
 たへて久しき祭いとなむ  
 田 哥すら君めてたしと諷ふらん  
 むら雨はれて山ちかく見ゆ  
 やはせ舟喧嘩を乗せて漕出す  
 錢ぬすまれて呵る僧  
 とある時嘆の誦文わすれたり  
 月やいつこに元日の晨  
 若水を野に汲宿の花の春  
 着ならし衣牙かへる袖  
 飛脚来て父なきよしを語りける  
 世をも知ります座主の御心  
 墨氷る寒夜の外面靜にて  
 鏡に耻よそら泣の顔  
 夫持ぬみそしの浮名立けらし  
 長者をにくむ人のさかしら

大凡 大凡 大凡 大同 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡 大凡

信濃路や里にあまれる牛の數  
大

荊<sup>つばき</sup>をみたす山かけの秋  
大

入月に出る日かはる霧なから  
大

わきて露けき二位殿の舟  
大

土器を残すくなにあやまちて  
大

としゆくはかり阿房也けり  
大

白雪に水風呂流す夜半過  
大

前の國司の明日は立るゝ  
大

病中を申わけなる哥よみて  
大

菓子<sup>こし</sup>の甘みにしめる水引  
大

雨の花晴なほ咲ん粧ひに  
大

二番鳥の友さそふ春  
大

立秋  
大

秋たつやきのふのむかしありのまゝ  
大

雨ふるやことに秋たつ日也けり  
大

かたひらの身に冷<sup>ひやま</sup>しき假寢哉  
大

斗舞  
唸

名古屋斗  
拙

千代尼

鼠尾草<sup>みそはぎ</sup>や身にかゝらざる露もなし 曉臺  
あはれ世や麻木のはしの長みしか 也 有

朝比奈と鬼の首引したる繪に

あさかほに引勝<sup>また</sup>れたるしをに哉 二 柳  
薺の翌は見ゆれと人の上 一 鼠  
薺や明星すめる 罌<sup>すい</sup> 友  
瘡落て朝かほ清し蚊屋の外 キ 萱  
朝顔に島原ものゝ茶の湯哉 無 腸  
島原や踊に月のむかし顔 几 董  
ひたと犬の鳴町過て躍かな 蕪 村

松崎にて

手に袖にはね題目の踊哉 斗 文  
うき人に手拍子のあふ躍哉 百 池  
一夜つゝ闇になりゆく踊かな 伏水李 收  
踊見る人のうしろや秋の闇 定 雅

自適

三十を老のはしめやすまひ取 道 立

踏フミはつて四十を越へぬ相撲取  
 引組ヒキグミて猶分別ユナワカやすまひ取  
 餘所ヨリ心ココロやたけにはやる角力カクリキ哉  
 やはらかに人分ヒトゆくや勝相撲カチウマ  
 乗ノリかけの角力カクリキに逢アりうつの山  
 負マカましき角力カクリキを寝物ネモノかたり哉  
 おく露ツキのこほれてひらく桔梗キキョウ哉  
 すスき吹中フキナカにも立タりをみなへし  
 雨アメの日ヒやもたれ合アたる女郎花ヨウガ  
 同出  
 九雪クニ有アル石イシ有アル橘キハチ村ムラ舊コウ國クニ蜚ヒ喬キョウ羅ラ川カハ  
 湖ウミ弓ユミ

## 憶鬼貫

さひしさの終ハジメに穂ホに出る薄哉ウス  
 待マるハと思オモふ夕ユフのすスきかな  
 なてしこやをはなか袖スリーブに咲残サキノコ  
 芙蓉花フヨウ  
 霞東花カサ  
 家足イサ

## 剃髪の人に

花ハナならぬ身ミとな思オモひそ薄ウスの穂ホ  
 秋萩アキハギのうつろひて風人フウジンを吹フク  
 夕月セキツキに誰タレやら戀コイし萩ハギの原ハラ  
 賀瑞カズキ  
 楊良ヨウリョウ  
 美角ミカク

鳥濡てたつや朝日の小萩はらナニヘ稀  
 小車の花立伸て秋曇りナコヤ東  
 寢覺して虫聞秋となりにけりイセ茶  
 更る夜や艸をはなるゝむしの聲イカ桐  
 雨州壺聲

一日の榮といへる中に

生垣にはさまれて咲木槿かな 正 白  
 發心の人見送るや木槿垣 路 曳  
 やふれ箕やいさゝかなからことし 綿 竹  
 木綿とる大和河内の日和かな 霞 夫  
 秋の空澄たるまゝに日暮たりナコヤ亞 滿  
 鳥は草は何やらかやら秋の野ら 眉 山

河邊逍遙

工みたる限り散ゆく花火哉 士 川  
 花火ちるやしのひの君の見ゆるほと 白 堂  
 花火盡て美人は酒に身投けん キ 董  
 物焚て花火に遠きかゝり舟 蕪 村  
 利酒に酔ふてもとるや秋の市ナコヤ臥 央

父か醉家の新酒のうれしさに  
 入日さす鱸の口や魚の店ユガ喜召  
 紫のひしこに勝やとうからし  
 舊國水波

## 郊外

牛蠅は牛をたのみつあきの風移  
 振上た我手詠めつあきの蠅ナニハ桃喬竹  
 網をすくともし火あをつ秋の風乙總  
 秋の風芙蓉に鐵を見付たり蓼太  
 舟待て背戸もさゝれす秋の暮一鼠  
 戸口より人影さしぬ秋の暮青蘿  
 とにふれ日にもよる也秋のくれ雨  
 大寺や僧にも逢すあきの雨山  
 肆

## 清光

嵐吹草の中よりけふの月楊良  
 名月や君かねてより寢ぬ病太祇  
 けふの月關守人もさふらはす我  
 夜鳥や曉かけてけふの月万容



良夜訪ふ方もなく訪來る人もなければ

中く／＼に獨なれはそ月を友  
月の秋や二百とほかのはつかのと  
月は秋は物思へとのなんのかの  
道無燕  
立陽村

湖上眺望

名月や辛崎の松せたのはし  
十六夜やしはし黒谷眞如堂  
黒谷の初夜聞月の野川哉  
風かなし夜々に欠ゆく月の形  
物毎の満るはいやし十三夜  
後の月翌は秋なき思あり  
鳴鹿や月夜なからに小雨降  
聲かれて松に脊を摺小鹿哉  
啼度に草の露ちる鶉かな  
松むしやともし火青き西の對  
二ッ置く人の心や種ふくへ  
かたはらにかぼちや花咲く野菊哉  
召生弄守士居阿臺董雨董  
波佛我文一巧居阿臺董雨董

雨にぬれ風に吹るゝかゝし哉  
二三尺秋の響きや落し水  
からうして山田實のりぬ落し水  
田原野  
月  
董溪菊

## 旅中佳節

馬の脊の高きに登り蕎麥の花  
盆ほとになるてふ菊の蒼かな  
手折捨る山路の菊のほひ哉  
其中に白菊の名を問れけり  
佛壇に十日の菊のほひ哉  
鶏頭に風のつくや持佛堂  
けいとうは始終を花の盛かな  
はなれ家や門田のわきの鶏頭花  
文徳御蝶月几同移竹  
皮野風夢居董

## 倣老杜搗衣

よその夜に我夜後るゝ砧かな  
片くは月夜の暗のきぬた哉  
雨そふて悲しさつるゝきぬた哉  
小夜砧隣の少年戻りけり  
大魯  
菊尹  
鳴鳳  
春蛙

うき人を心にこめてきぬた哉  
ひとの國に漸馴るゝ夜の砧哉  
憂我にきぬたうて今は又止ミネ

秋聲

逢坂の町や針研く夜半の秋  
層に露置夜半となりけり  
朝寒や脊戸の芋堀佛の日  
あたらしい綿入着たる夜寒哉  
稚子のとしけちたる夜長哉  
秋の戸に倚ル袖乞の鼓かな  
秋もはやはつかに残る鹿の聲

於金福寺興行

ともし火にしたしくなりし夜寒哉  
書をよむ窓に雨間の月  
籠の中の鶉おもひを鳴ならん  
旅はめさむる業そ多かる

正 白

松 道 立  
白

正 白  
キ 萱 村  
幾 我 則 董  
嵐 月 居 甲  
士 川 僧  
鉄 宗  
松

鹽竈に鯛の濱焼所望して  
 若殿はらの朝狩に出  
 春風にかろき衣紋を吹れけろ  
 ちやうちん霞む島原の口  
 うき戀の果や乞食の物狂ひ  
 誰か佛の道に入らむ  
 世につれていく秋五位の身を経りし  
 車に月の影しらむまで  
 鈴虫の聲ふりかはす淺茅生に  
 平家語りし人消へにけり  
 武者修業我國遠く過來つゝ  
 聶撰ム館に年を迎へて  
 花鳥にわか菜を祝ふ賀振舞  
 春の夜深く和琴開ゆる  
 おもしろや加茂の川瀬を歩わたり  
 市の奴とやつす法の身  
 松の戸に妙なる歌をらく書し

凡立 白董 立 白董 立 白董 立 白董 立 白董 立 白董 立 白董 立 白董

葦に埋ム二筋の路  
 さみたれに草鞋を重く履<sup>は</sup>わひて  
 つらさあまりに飲習ふ酒  
 來ぬ人を梓の弓にかけて見む  
 同し隣に中のよしあし  
 煤はらひ雪の降日に取かゝり  
 癩疽いたかる顔のきたなき  
 たそかれをねたれ込れし十三夜  
 ことしは菊の出来榮もなし  
 秋過て鶯見たるあたゝかさ  
 田舎歌舞妓の畫のよすかに  
 こゝろにもあらぬ戀する哀也  
 鼻に袖置くすゑ摘の君  
 入日さす邊りけうとき花の陰  
 長柄の傘をひらくかけろふ

董立白 董宗白 立董白 立董白 立董白 立董白

## 曾久安計可良壽

## 冬の部

ともし火に竹の葉すゑのしくれ哉  
 朝淨うれし夜の間の初時雨  
 聾入の宵月細し初しくれ  
 野風吹室町かしら初時雨  
 宵くの砧もうとし初しくれ  
 天地をしはらくたもつ時雨哉  
 一夜つゝ淋しさかはるしくれ哉  
 嵯峨の小春都に近き心かな  
 初冬や兵庫の魚荷何くそ  
 似た事の三つよつはなし小六月  
 返景  
 多されやきたなき川の夕鳥  
 舟慕ふ淀野ゝ犬や枯をはな

關臺

正白  
 鑊僧  
 几董  
 我則  
 几圭  
 宋阿  
 震夫  
 召波  
 千代  
 尼  
 定雅  
 几董

斧の音深くも入らす冬の山名古屋事紅  
 一むしろ芋ほす寺の冬構へ同萬岱  
 御影講の花のあるしや女形太祇  
 姑の鬼もこもれる十夜かな下開鶯  
 姑の出た跡ぬくき火燵哉ヘリマ半拾

夜坐

四つに折ていたゝく小夜の頭巾哉無腸  
 我頭巾うき世のさまに似すも哉燕村  
 紅閨の足につめたき頭巾かなキ董  
 關守のゆふへかしこき頭巾哉出聲東季  
 牛賣のにくゝも着たるつきん哉乙總  
 罪深き小袖の下の帟衣かな管鳥  
 紙子着てとのやう聞老女哉山肆  
 着て見えてはとしも止める紙衣哉一鼠  
 無心無佛

こからしも人の付たる名也けり几圭  
 こからしや川吹もとすさゝら波百池

用のしきりに募る入日かな  
 志  
 用や松一木あれば松のかせ  
 残  
 こからしや油からひし石地藏  
 龜  
 用や日も照り雪も吹散らす  
 樗  
 良郷夢慶

ある方にまねかれて

爐開や紅裏見ゆる老のさび  
 几  
 爐ひらきや炭の香守る人の貌  
 霞  
 もの思ふときれや炭の發ル音  
 鶯  
 埋火や助炭に残る風の音  
 ナニハ百  
 召  
 炭を引下部ゆかまぬ心かな  
 波  
 非

十月既望

とはさへなくて月見ル寒かな  
 子  
 一夜ふた夜降ものかはる寒哉  
 東  
 麥蒔の火繩に寒きけふり哉  
 九  
 かへり花散日は知らすなりにけり  
 ナニハ守  
 飄  
 さし向ひ嘶の消る霜夜哉  
 子  
 老懷



うかくと生てしも夜や蟋蟀  
甘なうて薪に霜のきりくす  
苦撫て見るや霜夜の山かつら  
霜の月漁村は地に沈みけり  
霜に歎す蟬<sup>せみ</sup>髭を握りけり

二柳 霞夫 由翁 一魯 大魯

洛東の正阿彌か樓上に會して

日の筋や落葉つらうつ夕眺  
人にもよらす冬の蚊柱  
よき酒を賣肆<sup>いりやう</sup>の軒ふりて  
胡の國へ書ミもとめ去  
牧を出ていく秋駒の月にあふ  
露明らかに草高き原  
夢に見し地藏を拜ム肌寒き  
世になき夫の氏そ口惜し  
小ふくさにさめぬ薫りをしのふらん  
はし居そゝろにたそかるゝ空

曉臺

几董 我則 蕪村 一香 則村 臺香 則晉

月にぬれて薺の蔓秋ちかく  
 加持の奇特の帛を地にさす  
 筑羽なる萱ふき二人雇はや  
 罪もうれしき有職の身は  
 葩煎といふもの焦しぬる雨の日に  
 法の因みの一大事聞  
 花の客横川の寮に雛持て  
 すみれ摘なる透垣の下

卷半なる比風雨はけしく時ならぬ神のおとろく  
 しうとよろき鳴にそ各打驚て筆をさし置ぬ

多夜興

イは猶ふる雪の夜路哉  
 我あとへ來る人の聲寒  
 世に深く隠せし名をや尋らん  
 餅百には過ぬ家居也けり  
 切ル鉄にかゝやく宵の月

董音則 董臺村 董音則

几 樗 北 嵐 良

董 良 野 甲

裸身を吹秋のはつ風 董

下畧

はつ雪や消れはそ又艸の露  
初雪やすゑの玄猪の荒ついて  
降とけぬ雪におかしや蓑と笠  
修行者に此杖やらん夜の雪  
夢とんとて魂うつむよるの雪  
燕村 斗文 太祇 道んめ 立

或時文のはしに聞ゆ

雪小ゆきまたけの股にたんまれり  
積る後は只散まての小雪かな  
鮮あざやかき魚拾ひけり雪の中  
ゆりあはす蓑のひまうつ霰哉  
冬の情月明らかにあられ降  
雪に出て雪の見所いつち哉  
雪のくれ馬もひとつはほしきもの  
大雅堂 美角 几董 弄我 曉臺 一音 蝶夢

遊龍安寺

駕ゆくや夕日江に入水のあや  
 水鳥のかしら並へし朝日哉  
 磯ちとり足をぬらして遊ひけり  
 多の日やとけては氷るわすれ水  
 切ためや花の根に添ふ薄氷  
 光るめり糞糞の中薄氷の薄氷  
 用水の用にもたゝて氷かな  
 霞三自一燕布凡  
 東曉笑鼠村舟董

## 夜行

松明消へて江の音寒し鴨の聲  
 野の池や氷らぬ方にかいつふり  
 皮剥の業見て過る枯野哉  
 よはくと日のゆきとく枯野哉  
 たのみなき若草生ふる多田かな  
 冬かれや芥しづまる川の底  
 内海の權にちらりと落葉哉  
 西吹はひかしにたまる落葉哉  
 燕凡移太麥同凡雷  
 祇水董夫

## 病後

から鮭をしはふりて我皮肉かな  
 乾鮭や琴に斧うつ響あり  
 雪國へ歸る人あり冬こもり  
 夜を好ム我に癖あり冬籠  
 養凍りや格子のひまを洩月夜  
 養凍りや精進落る鐘の聲  
 月雪の身を香に匂ふ海鼠哉  
 ひたふるに旅僧とめけり納豆汁  
 鮎喰ふて酒呑ム下戸の思かな  
 鰻喰し妹か住居もあれにけり  
 嵐 太 月 士 巧 董 宕 雅 福 村 臺  
 山 祇 居 巧 董 宕 雅 福 村 臺

## 對僧

佛燠てさらに葱を養夜哉  
 鉢たゝき物に狂はてあはれ也  
 紛るへき物晋たへて鉢叩  
 鉢たゝきうかれめに名を問れけり  
 四辻にうとん焚火や冬の月  
 冬木立月骨髓に入夜哉  
 几 石 可 樗 家 道  
 蚩 友 重 良 足 立

## 野行

ぬくく／＼と師走日和や麥の丈  
 水仙にたまる師走の埃かな  
 寒梅や雪ひるかへる花のうへ  
 寒梅や文覺行におとろへす  
 うき人に年積りけりよそなから  
 家の子に酒ゆるしけり年忘  
 醉李白師走の市に見たりけり  
 寺からも買に出けりとしの市  
 年内立春の日禁庭を拜して

としの内に來にけり春の日の御門  
 としの夜や梅を探りに花屋まで  
 除夜

年ひとつ老ゆく宵の化粧かな  
 とし守る夜老は尊く見られけり

集馬 葦太 優才 百池 士喬 正名 袖女 田女 几董 燕村

一ことをたも教へを得しはやかて師なめりとて、秋とにあしの丸屋に魂むかへい  
となまれしは、五十餘人にみてるよしを、物のたまふ始に先いひ出られしそ、い  
と有かたき例に人はいふめり。今はや廿とせのむかしとなりనికి、凡圭のおち適  
難波に來たらるゝことに、連歌のあそひ夜となく晝となく人／＼らあつまりて、  
すゝけたる耳をかたふけ、句ことにめさむるものにもてはやせし。吾其席にあれ  
は必しも打ねまひつ、若き人よ、さる句はかうそつくるものなりなと、まめたち  
て教へられしかうれしうて、ひたすら阿彌陀ほとけに祟まへしよりいづかなしま  
れて、さや／＼しき古家をとひもしやとりもしてかたらはれしものから、此句作  
るわざにはやかて師にてそます。をこのあそひわすれゆくめるまゝ、おちにもう  
と／＼しうてわかれぬ。さるをこの四とせかほとのみなか住に、むかしのすさひ  
稀／＼いひ出るに、凡輩そ今の世にたくひなきと聞て、をり／＼文のいきかひし  
て言かたらふも、おちかむかしの契の末むなしからぬになん。ことし十まりなゝ  
とせの手むけすと聞に、ありし世の倅まつおもひいてられて胸つふれ、何ことも  
いはいはすなむなりぬ。

諸とも  
に記念としのふ紙衣哉  
芳馬

この句は亡父か追悼にせうとの人の申出し也今是  
に十七句の員を次一折の俳諧となし侍りて正當の  
日誦經の後牌前に備へ懷舊の意を述るものならし

十七年を髪のはつしも  
几董

此夜誰秋風樂を籟やらん

月うつくしく御溝ゆく水

藥艸履露の重みを支へけり

豆腐煮て賣山もとの家

這廻る兒を祖父のかしつきて

降らぬ五月の蚤多きとし

乗かけにいせ路の早苗見て過る

國替つらししらぬひの果

移る世の遊女か心あさからす

讚佛乗の因みなるらし

禮いふてふせやを出る有明に

身はぬれ鹿のふたつ連ゆく



霧 け ふ る 岸 に 米 搗 水 車  
 は つ せ 詣 と 聞 は う れ し き  
 春 や む か し 嘶 相 人 も 花 の 時  
 梧 桐 の 几 長 閑 也 け り

安永丙申歳九月廿三日

几 董 書

校 合  
 彫 工  
 書 林

橘 仙 堂 善 兵 衛 門  
 吉 田 九 郎 右 衛 門  
 白 万 砧 容  
 九 湖

○校訂者曰、文化  
六年所纂村七部  
集には誤て「花  
鳥篇序」とせり、  
今之を訂す。

## 續四歌仙序

今は十とせあまり六とせのむかし、蕪村橋良の二叟とよもに、嵐山かあふらの小路の僑居にして、百鬼夜行の夜話に遊はんといへりしを、あるしの叟耳打ふたき、あないふせ、いかて四吟流行のおかしみには過しと、終に膝押の四歌仙となり侍りけるを、書林何かし木にのほして、世にひろうし侍りぬ、しかるに三老は既に没して、我獨存せり、爰に此ころ尾はりの曉臺、嵯峨の花にうかれて洛に在うへ、はりまの青蘿加茂のわか葉見むとて、これも都にさまよひありけるか、ある日樵木町の月溪か旅舎に落あひぬ、余、觴をとつて、いさや此なかれに添ふて、あやしみの樓にのほり、かの老婆子か化て絃歌をなすに戯れはやといへは、あるし眉をしはめていふ、われその妖怪かために、けふはた醒せり、ともに狭き蚊帳に入て訖寐せんにはと、せちに二客をとよめ、やかて筆硯をとうて、ふたゝひ一夜四歌仙の後を興することにはなり侍りぬ。

○ふたゝび一再  
び。  
○こと一事。

天明七丁未孟夏上浣

夜半亭几董書

○ちらしー散ら  
し。

○山おろしー山  
風。

其 一

壁やれてありたけ草の四月哉  
飛蟻出る日の晴こゝろよき  
遠騎におのか風情やはこるらん  
咲てはつかの梅ちらしつゝ  
月かすむ春の泊に酒買て  
波の浮鯛よると見へしか  
能登とのゝ影はかきけす山おろし  
けふの飯喰ふ命うれしき  
朝かほの花の裏ゆく芥道  
廓を逃す露のあかつき  
預りし刀をかくす袖の月の  
須磨の並松風の寒きに  
虚網は鶚の聲もなかりけり  
味に饗す伊達の藏元  
折もよく本因房の假まくら

曉 臺

凡 月 青 董 臺 蘿 溪 臺 董 溪 蘿 臺 董 蘿 蘿

董 溪 蘿

## ○雜歌○

秘めおく書をそと寫しとる  
 花に對してうつ也樓の夕鼓  
 普茶の崩れの睡氣さす春  
 巢の蜂の怒するとか飛立て  
 美人死たるあとの叢  
 あさましと墨の袂に世をかへし  
 伶の役にはとてもさうなき  
 たひら雪柳の筋に降添り  
 狸の領となりし賣家  
 さま／＼の人の情も身に眞はて  
 我明盲を神もうけすや  
 これにさへ今ははなるゝ古具足  
 野分の荒も塩飽七島  
 弓張に五更の天は澄りけり  
 こといふかしき院參の露  
 襪の片足見へぬから糴に  
 こと葉多くて憎き若者

溪 蘿 臺 董 蘿 溪 董 臺 溪 蘿 臺 董 蘿 溪 董 臺 溪

○單行本及び原本  
「其二」の字なし  
今便宜之を加  
ふ。

○いく夜あふる  
る。いく夜あふる  
る。

○らんーらむ。

一の瀬も二の瀬も高き星明り  
芦かりとりて炬火に次  
米五石餘りて花に神事能  
家くにはほふ獨活に早蕨

## 其二

花の散には春をうらみ月の曇には我身を思ふ

うつみ火やいく夜あふる鼻はしら  
霜に鳥の寐すもある音  
江の楓くれなる深くけふるらん  
御門に入はたゝ秋の風  
番匠の貝をそろゆる朝の月  
剛飯蒸て配る辰の日  
足利のあたりはしのふむかし染  
わりなき戀を寺へ預る  
朝起をひとり仕習ふかきつはた  
よるへさためす蜘蛛の糸ちる

青  
蘿

月 几 曉 溪 蘿 臺 董 蘿 溪  
臺 董 溪

臺 董 溪 蘿

○箱—宮。

○なりけり—也けり。

○かせ—風。

傘工か傘干すかたや時雨らむ  
 野しめの雀賣て行也  
 おほかたは兀てしまひし鬢の髪  
 二度めの妻は殿の媒  
 月あけてかけるふ闇のみたれ箱  
 旅のやとりに人膺忌して  
 貫之か花を尋る土佐泊  
 入日のあかね雨ちかく見ゆ  
 矢軍に曾<sup>エヒ</sup>奴<sup>ヌ</sup>の紫色めけり  
 泥を蹴あけの使ふたゝひ  
 祐天の興をしつかに昇居て  
 をりてまいらす雪の紅梅  
 さとひらく扇のおもて匂ふかに  
 放下か娘みやひなりけり  
 七ツうつ上野の鐘や浅艸や  
 鳥も木葉も吹まくるかせ  
 目の前に物盗み去ル非人とも

董 溪 蘿 董 臺 蘿 溪 臺 董 溪 蘿 董 臺 蘿 溪 臺 董

○まつ—松。

○水ふる—水風  
呂。

其 三

二、階の裸大笑ひなる  
追善に浮るりかたるけふの月  
木津はことしも綿の上作  
秋の雨大炊の局下り居して  
馨うたてくも蒼朮をたく  
飼殺す猿の長生哀なり  
深き春邊をこかくれの神  
花とさす藤のうしろの遅櫻  
興はおほろよ琵琶借にやれ

臺 薊 溪 蘿 董 臺 薊 溪 臺

雨雲にめぐりもあはて夏の月  
田中のまつに虫送る聲  
簾捲浅茅か宿に碁を打て  
水ふるぬるく皆噓ひけり  
張繩に馬衣の濕りかけわとし  
榎へ落し雷のあと

月 溪  
曉 臺 青 几 臺 溪  
董 薊 董

○築紫―校訂者  
曰「筑紫か。」

大宮司か白き頭にえほしきて  
娘見にくる人としらしや  
宵の躍おかしき身こしらへ  
新漣船の錢遣ふ月  
待合す秋の古手の立直段  
女あるしの眼鏡かけつゝ  
濯頂を大日房の勸め來て  
冬のよめ菜の香に匂ふ苞  
小野炭に今朝の初雪きえ  
鏡も見すに自剃する窓  
死なて居る其きさらきの花の頃  
けふは照ル日もさへ返りぬる  
畑打も黒津の里の川普請  
寺の茶釜を汲ほして行  
鶏の垂尾さひしく梁に  
はるゝともなき入梅の夕榮  
築紫女に三線習ふ小船頭

董 溪 臺 董 蘿 聚 溪 蘿 董 溪 臺 董 蘿 臺 溪 蘿 董



○くれ—單本著。

○校訂者曰、單行本及び「其四」の文に「其四」の字なし、今便宜之を加ふ。

無筆の嘘の合ぬつしま  
口切に淀屋の風をほのめかし  
はらゝ子の色寒き此ころ  
逝ものはかくのとき歟最上河  
鬼と成君か跡を吊ふ秋  
身こもりのまこと嬉しき月の前  
鈴むしはなす露の半蔀  
夕かほのあした撼しおくれ咲  
文珠を祈る醫師貧しき  
纒なる油あやまつとしのくれ  
小石小坂の風杉を押す  
花折て駕の戸を引朝朗  
春閑なる手炉の埋火

其 四

苦哉名利人  
樂矣乞兒身

蘿 溪 臺 蘿 董 臺 董 蘿 臺 蘿 董

○みしか夜―短夜

乾鮭に名利のあふらなかりけり  
 世は裸身の雪や霰や  
 狩倉のあととはしとろに犬吠て  
 小松かす糸に落るありあけ  
 かつき出す市の芋麻肌寒く  
 親子のされに柿を奪あふ  
 ころく板間へ轉る古鼓  
 踏歌の後を神もわふらむ  
 篠分て我より先にしのふ人  
 拙き運と拔はなつ太刀  
 玉緒の茶入懷紙に包み捨  
 雨暗うして明るみしか夜  
 きえ残る火串の邊り腥く  
 身はなきものに會津根を越  
 懷の鏡にうつるこゝろかも  
 御廟ゆかめる蒲公英の露  
 初花にむかし顔なる朝の月

青蘿臺溪  
 曉臺溪  
 月臺溪  
 蘿臺溪  
 董臺溪  
 董臺溪  
 董臺溪  
 董臺溪  
 董臺溪  
 董臺溪

○われにおとろく  
—我に驚く。

○にはふ—句ふ。

○施—麗カ。  
○そら—空。

硯をとれは水もぬるみて  
春霞橋本の遊女よをいかに  
かたはかりなる雛祭する  
國替に百里ゆらるゝ鴛の旅  
髭の白さのわれにおとろく  
基をうつて童子の歸る雲深ミ  
水の筋よりにはふ風關  
酒涼し石ふしなんと調し來よ  
紙折添て配る木枕  
氣色して街か妹の宵工ミ  
身の秋凄き月の影ほう  
騎出す芦毛の駒の萩を踏  
霧の籬のそなた玉河  
五百年鉦鼓うつなる常念佛  
あはれ采女か髪もし見る哉  
施頭歌を扇のはしに書とめて  
鳥啼霜のあかつきのそら

蘿 董 臺 溪 臺 蘿 溪 臺 蘿 董 臺 溪 董 蘿 溪 臺 蘿

○ 坐 塵 ●

砂 川 の 流 に 添 ひ し 花 の 一 坐  
 行 次 第 な る 俳 諧 の 春

溪 臺

## 五車反古序

〇〇文庫―あらみ。  
〇七都―えらみ。

〇一―取行本は  
二。

〇せん―せむ。

維駒父の十三回忌をまつるに、集えらみて五車反古といふ、ふかき謂あるにあらず、父の冬こもりの句によりて號けたるなるへし、はた父の筆まめに書あつめたるものを、よゝとねちこみたる袋の紐ときて見れば、贈答の詩の稿あり、あるは花に來れといふ天狗のふみあり、今宵の雪をいかにやなとそゝのかす、高陽の徒の手紙あり、またはいひすてたる歌仙の半へはかりにして、ところ／＼墨引たるあり、其裏には多く人の句も、みつからの句もかいつけたり、それを今かく爪揃して、今の世の人の句も打ましへならへもてゆくほとに、上下一冊子となりぬ、序を余にもとむ、余やまひにふして、月を越れとも起ことあたはず、筆硯の業を廢することひさし、故をもて其ことをはたさず、これこま忌日のせまりちかつくをかなしむ、しは／＼來りもとむ、余曰明日を待て稿を脱せん、明日すはなち來る、やまひます／＼おもし、又曰明日を待て稿を脱せん、維駒終に卒業の期なきを悟て、窃に草稿を奪ひ去、余も亦追はず、他日そのことを書して序とす。

脇起俳諧 春

春泥舍 召

波

曲水や江家の作者誰くそ  
 唐士使かへり來し春  
 のこる月山なき空に霞らん  
 時の鼓を打しまふたり  
 藻舟漕く男の髪もみたれたる  
 三日の糧の用意かしこき  
 仙乏のしるへも今は跡なくて  
 鵲巢くふみんなみの松  
 まとゐして深き軒端の尊さよ  
 祈の僧の眼とちたる  
 あらぬ戀中く今に語らまし  
 吾妻ふりなる歌そかはゆき  
 花かつみ刈とるほともなかりけり  
 夕日斜に葬の行見そ  
 珠數挽の二間間口を住なして

維 蘇 田 駒 村 福 駒 村 村 駒 村 福 駒 村 駒

駒 村 福

○ウシラーカシラ

丹<sup>ニ</sup>をべたくと大津繪の鬼  
 かへり花ひらき梢のにほふらん  
 小春の月の雨暗き夜に  
 亡妻の子を懷に通ひ來し  
 けふりたえぬる香の名はそも  
 ひかくと室の揚屋の銅盥  
 響きくぼかに杙せうつ音  
 胡蘿蔔の花は咲すもありぬへし  
 下福島の鮓なるゝころ  
 人口に人妨の晝寐して  
 隣に耻よしうとめの聲  
 齋料の米こほしたる苦しさに  
 おもたき傘を返す日もなき  
 月の宵狐や僕を匂引けむ  
 露踏したく艸の裏門  
 菊合兩六波羅のほのめきて  
 頭<sup>カムロニ</sup>童齒<sup>アツベナリ</sup>

福村 福村 福村 福村 福村 福村 福村 福村 福村 福村

○作者名ナシ。

脇起俳諧 夏

夢三夜、穢をやめよと御詫宣  
二十年來洪水もなし  
うたけして花の日なたに老夫婦  
遠ききゝすに近き雉子鳴

卯花や茶俵つくる宇治の里  
山ほとゝきす晝も啼過  
操返し馬上に古詩を打誦して  
名に聞えたる酒たうへけり  
磯浪の籬こし來る月の宿  
うら吹葛のおもてなつかし  
かくうとく隔る中の秋ふけて  
聞もつらしや尼か呬  
次の間のともし火既消かゝり  
狸を射んと小弓はり置  
一ト谷はみな維盛の子孫にて

駒 村 福 駒

立 董 則 立 駒 執 几 我 道 維

筆 董 則 立 駒



こゝから埃にむせふ麦秋  
午時さかる大師廻りのほだれ足  
微<sup>サ</sup>雨<sup>ノ</sup>降こむ豆腐屋の軒  
なかくに賢く見ゆる新<sup>ミ</sup>参<sup>マ</sup>  
木綿合羽をかく打着て  
月の夜に花を尋る艸枕  
いく田の邊り春衝啼く  
をちこちと石きる音の霞むらん  
再造る重源かてら  
やせ馬に第一駄おくり來て  
とり落したる双六の賽  
はらからに物や思ふと問れたり  
夕月かゝる聲の垣  
猫の子の頬を塞かる秋の風  
白川祭雨に淋しき  
餅米にゑませし麦の打交り  
雇れ人の腹をいためる

脇能の笛も聞ゆる中の口  
 はや五つ目の御祝義もすむ  
 暗かりし夜のしら雪とふりかはり  
 入幡へあかる乗合の僧  
 しらぬひの咄びんなく聞さして  
 かたみとならん香や炷へき  
 花の名の今はた残る嶺の雲  
 鶯老ぬ春やくれ行  
 則立董則駒董立駒

春の部

蓬萊の山まつりせん老の春  
 とかくして松一對のあしたかな  
 鰯喰し我ともあらぬ難煮哉  
 闇かりにのとけき春や城の六  
 古頭巾烏帽子に捻よ花の春  
 聖廟よりかへさに  
 鶯や藪をへたてゝ朝日寺  
 召波  
 蕪村  
 移竹  
 太祇  
 几圭  
 江戸青  
 峨

うくひすの庭をありくや雨の後雨遠  
 東風吹や雨のにほひの夕曇伏水宿英  
 人目なき宿は巨燧に子日哉竹波  
 粥杖や梨壺の五人打はつし混花羅川  
 みのむしの古巢に添ふて梅二輪燕村

## 幽徑

埒もなき荆か中の野梅哉几董  
 梅さくや馬の糞道江の南混花無陽  
 咲かゝる梅に餘寒の日數哉春爾  
 百姓のたはこは臭し梅花嵐山  
 墨よしや千鳥こほる隴月召波  
 雨ちかき温泉のけふりや隴月維波  
 おほろ月放下の親子戻りけり成文  
 晴天に暮てまもなし隴月

## 旅中吟

貝塚の町へ這入はおほろ月道立  
 過て匂ふ酔屋の門邊や隴月春坡

十五夜とカタ／＼よらすおほろ月 百池  
 春の月 鶏 裂ヶはくもりけり 南部素郷

京に在し比

北山の餘寒を見るや窓の内 江戸泰里  
 底叩く音や余寒の炭俵 召波  
 鼠追ふや椿生けたる枕上 田福

西の京にはけもの栖て久しく荒はてたる家ありけり  
 いまはそのさたなくて

春雨や人住て煙壁を洩る 燕村  
 鶏の子の觜よこしけり春の雨 維駒  
 春雨や簑の下なる戀ころも 几董

行旅

馬借てかはる／＼にかすみけり 江戸蓼太  
 放馬終に野末の春かすみ 臥央  
 うしろより雨の追くる焼野哉 阿波大魯  
 轉りや野は薄月のさしなから 嘯山  
 嵯峨にて

○几巾一風。

垣の芽の袖口ども、出されたる  
 蝶、くや左を追は右に在  
 日うつりや高瀬へ分ッはるの水  
 しつかさや雨の後なる春の水  
 磯山や小松か中をはるの水  
 几 董 波 好 則 秋

初午二句

はつ午や鳥羽四塚の鶏の聲  
 初午や柳はみとり小豆めし  
 尾陽也 蕪 村 有

二月堂

けしからね牙返りたる杳の音  
 大佛の柱くぐるや春の風  
 濱の子か風の名呼ふや几巾  
 いかのほり月も出てある三笠山  
 漁舟見えて吹なりはるの風  
 浪花舊 維 駒 原 柳 夢

遠國より句をとはれて

難波女の懷寒しはるの風  
 春風の吹出したる筏かな  
 佳 女 業 め

○萃一箇。

○七都集本は「双岡に先師晩山のしるしあり」の下に「交鶴」とあり。

夕くれに申合せて蛙かな  
 流木にしり聲寒き蛙哉  
 春のよや晝雉子うちし氣の弱り  
 雉打て歸る家路の日は高し  
 かけろふや同したけなる小松原  
 きり芝の野芝にもとる董かな  
 大日枝や重踏分る路もあり  
 海苔の香やまたみぬ海のなつかしき  
 乾海苔やおほろくと海人か家  
 川  
 雙岡に先師晩山のしるしあり  
 其枝にのこんの雪の翁かな  
 杜口  
 五年みぬ古郷のさまや桃の花  
 石をきるやまの替やもゝの花  
 雨にひらく老木の桃や花あまた  
 大石士巧  
 桃山懷古  
 みおろせはいはんとすれば桃の花  
 道立

所思

桃山懷古

文皮  
 移竹  
 太祇  
 蕪村  
 塘雨  
 小松原  
 江戶  
 湖  
 舞  
 閨  
 鴉  
 雙岡に先師晩山のしるしあり  
 其枝にのこんの雪の翁かな  
 杜口  
 五年みぬ古郷のさまや桃の花  
 石をきるやまの替やもゝの花  
 雨にひらく老木の桃や花あまた  
 大石士巧  
 桃山懷古  
 みおろせはいはんとすれば桃の花  
 道立

浅き瀬に若鮎はしる夕かな  
 鮎汲みや喜撰ヶ嶽に雲かゝる  
 几 徳  
 董 野

柴の戸にあけくれかゝるしらくもをいつむらさきの  
 雲に見なさむ

法然の珠數もかゝるや松の藤  
 蕪 村

上巳

たちねの抓までありや雛の鼻  
 雪信か屏風も見えつ雛まつり  
 几 蕪  
 董 村  
 雛の宴五十の内侍酔れけり  
 召 波

雨意

白妙に十方くれのさくら哉  
 分入は川上寒し花に鳥  
 身すすほめ行や櫻の散木の間  
 江 戸 陽  
 櫻三日四日を花やあらし山  
 仙 台 完  
 山さとの人美しや遅さくら  
 維 駒

南都

花の露に鹿や目さます山かつら  
 自 笑

○良一殿。

棒突に盃をさす花見かな  
つまみ喰一日花の乞食哉  
太祇

四十以後の人三里に灸すへしと

二日灸花見る命大事也  
几董

誰ためそ築地を垂るゝ花櫻僧  
雉庵

添て來し野川いつちへ山さくら  
作不者  
知

咲日より今も散かと山さくら  
江戸一  
音

良つきや花にやはらく小役人  
臥央

けふ限に垣を仕まへは落花哉  
大石佳  
則

つはくらや花なくなりし三軒屋  
百池

誰園そ月夜春の夜梨の花  
正鏡  
僧

平調の糸や切けむ夜半の春  
正巴

十九日と廿一日の晴雨としくわきかたし  
婆かゝの肩ぬく空や御身拭  
几董

御影供や老て見まかふ角力取  
田原毛  
條

爐塞であるしは旅へ出られけり  
自珍

春の暮かりねの枕はつれけり  
雪居



○おもひーおも  
ふ。

養在深閨人未識

行春を鏡にうらむひとり哉江戸成  
 春くれぬ酔中の詩に墨ぬらん  
 几董  
 ゆく春やおもたき琵琶の抱こゝろ  
 召  
 春惜しむ人や落花を行もとり  
 燕村  
 花下に聯句して春を惜む  
 祇や鑑や髭に落花を捻けり  
 燕村

夏の部

ころもかへ一先居へる心かな移竹  
 酒のみの膝晝過ぎぬ更衣尾陽曉臺  
 白かさね憎き背中に物書ん蓼太  
 春を惜む心の外に更衣伊勢楊良  
 紀路まで花の旅して更衣百池  
 鳴つるかたを詠むれば  
 古歌の月今に残れり子規  
 太旨  
 おもひもの人にくれし夜杜鵑  
 祇原

○葵一葉

ほととぎす通夜の枕は扇哉  
山吹もちらて貴布禰の子規  
曉の遊女か吐血ほととぎす  
青 維 召 波 駒 峨

數ならぬ身はきゝ侍らす

岩倉の狂女戀せよほととぎす  
ほととぎす啼かと待ては卿の糸  
ふつゝかな我手悔みて夏書哉  
裕着て雨に寒かる僕かな  
待宵の身にしむ戀や絹裕  
短夜やいとま給はるしら拍子  
みしかよや鐘聞ヶは又かねか鳴  
燕 定 菱 川 董 村  
之 村 雅 湖 董 村  
兮 村 雅 湖 董 村

題後朝

短夜や伽羅の匂ひの胸ふくれ  
寐いそきの幬を後に咄かな  
一夜二夜蚊屋めつらしきにほひ哉  
浅ましや幬に透たる夜のもの  
橘や幬に基をうつ老二人  
江 戸 春 銀 几 董  
田 召 波 武 獅 董  
福 波 武 獅 董

## ○良一頭。

蚊屋を出て物争へる翁かな  
大魯  
提て行牡丹おもたき風情哉  
春坡

## 懷舊

牡丹折し父か怒そなつかしき  
大魯  
廣庭のほたんや天の一方に  
燕村

## 鳥散餘花落

かきつはた魚や過けむ葉の動き  
几董  
檜扇の葉に洩る良や燕子花  
嵐山

蛇落て驚く崖のわか葉哉  
維駒  
嵐山松の四月となりけり  
松鳥白居

道芝にあふひ祭の轍かな  
隨古  
よくみれば朝露持ぬ夏の艸  
江戸登舟

ゆりの花人もねふたき盛かな  
成文  
こかれたる雨を握て田うた哉  
几主

佐屋のわたりにてひとり小舟をやり早苗とるを見て  
几主

つまなしかさす手ひく手や田植舟  
曉臺

芥子散や脱の衣のひとかさね  
也好

○生へ―生え。

よはく／＼と蓼も生へたる浅瀬哉 季游更寄  
 野々宮や笹のふる葉の落る音 來之  
 夕暮や野に聲残る麥の秋 楚秋  
 麥秋の草臥聲や念佛講 几董

方丈石

持ありく家はいつくへ蝸牛 蝶夢  
 怠らぬあゆみ恐しかたつふり 太祇  
 蝸牛君かかたへともゝすしり 結魂 雁宕  
 點滴にうたれて籠る蝸牛 燕村

洛東芭蕉庵にて

蕎麥あしき京をかくして穂麥哉 々  
 むしり來し園のさゝけや長短 雀英  
 夢の間や茄子大きく成にけり 旨原  
 有感

生キて世にひとの年忌や初茄子 几董  
 笋に鋤かりにくる庵主哉 維駒  
 萍や樋を越ゝ水にさそはるゝ 吞獅

○青梅やー青梅  
 ○に。カッレーカッ  
 ○シ。カッレーカッ  
 ○ナン スーナン  
 メ。

我家のうしろを過て田植哉 雷  
 早乙女や先ひいやりと庭の土 江戸超 波夫  
 郊外

都邊はいつともなしに青田哉 雁  
 物問へは書て答ふる蚊遣かな 如瑟宕

宿借サぬあるしつれなき蚊遣哉 伏見湖 陸  
 青梅や女のすなる飯の菜 太祇村

青梅や眉あつめたる美人かな 燕  
 烟雨に青カッレか已に黄にナンヌといへるに

青かつし色としもなき煮梅哉 几董  
 夏の月平陽の妓の水衣 召波

遠淺に兵舟や夏の月 燕  
 さみたれや三線かちるすまひ取 大魯村

さみたれや我宿なからかゝり舟 竿  
 通宵待戀といふことを

占かたは獸にあらて水鶏哉 道  
 田の水を庭に引せて螢かな 維駒立

○附一断。

飛ふ螢蠅につけても可愛けれ  
 移竹  
 劔うつ水により來るほたる哉  
 管鳥  
 瀬田夜泊

飛螢闇の長はしかけてけり  
 明學  
 船頭の劓を逃るほたる哉  
 在江戸燕史  
 風薫る森の木陰や弓の音  
 文波  
 脊戸口に砥汁流るゝ菖蒲哉  
 大津亘洲

かの東臯にのほれば  
 花いはら故郷の路に似たる哉  
 蕪村

東武にありてすみた川にあそふ

都おもふ時や卯浪の薄曇り  
 鶴仲寺僧沂風  
 正宗か双をわたるしみつか  
 正巴  
 かけ出の髭をしほりて清水哉  
 召波  
 祇園會や胡瓜花さく所迄  
 超波  
 闇かりに座頭忘れて涼かな  
 也  
 涼居て闇に髪干す女哉  
 召有  
 弟子僧と寺住かへて避暑哉  
 維駒

〇鈎釣。

人皆苦炎熱

涼しさや花屋か颯の秋の艸

颯のおし動かすや雲峰

桐の木の小梢にちかし雲峰

蓮に誰小舟漕來るけふも又

卷葉より浮葉にこほせ蓮の雨

とく起よ花の君子を訪日なら

鈎舟に御僧を乗せて蓮見哉

讀李斯傳

廁なる扇も喰らふ鼠かな

鄙ひたる細工ゆかしき團哉

汗入して身を佛牀としる夜哉

床涼笠着連歌のもとりかな

葛水や願に玉の音す也

葛水やうかへる塵を爪はしき

相國禪寺なる

几董

是岩

如菊

杉月

召波

維駒

几董

熊三

我則

燕村

道立

几董

董

董

○七部集本は作者  
名なし、單行本  
により之を加  
ふ。

維明和尚の許にて

笋羹をもてなしたまふに

簞

心の塵もはらひけり

郊外

夏のくれたはこのむしの咄し聞

重厚

みそきの夜鴨川にて

むすふ手に翌の秋しる清水哉

五雲

脇起俳諧 秋

春泥舎 召 波

栗に飽て蘭に付く鼠とらへけり

三度起出し菴の永き夜

維駒

遠からぬ海の音聞有明に

几董

鳥の中を駕のちかみち

駒

鷹かりの御先みゆるとほのめきて

駒

初雪ふれり師走ついたち

董

朝込に針屋か茶のゆおもしろや

駒

もの心得し従者持けり

駒



## ○ 蝶 舞

うち惱む同車の君をかき抱き  
 しのひし宵の月は細くて  
 片さとはまた蚊遣する秋の風  
 古葉とともに桑こほるゝ  
 畢丸見よと楷子のもとによりかゝり  
 法師をなぶる仁和寺の兒  
 弦切し倭琴代々経る虫拂  
 眞午時の鼓徐にうつ  
 花ひとひら老杜か春やうつろはむ  
 厂ゆくころを松しまの旅  
 右に見し山は左にうちかすみ  
 楫とりめしを喰こほしつゝ  
 轉寐を起よくとよはるなり  
 沈香炷て懼る神鳴  
 願ひある女こゝろのひたすらに  
 廓の月日はてしなな身や  
 いさよひの鐘も冴來る萩の庭

駒 董 駒 董 駒 董 駒 董 駒 董 駒 董 駒 董 駒 董

○はやふーはやう。

○作英名ナシ。

露にひそみて哭ク翁丸  
朝寒くとの井の皮籠脊負行  
水ばなれたる年そつれなき  
納戸から京酒出して振舞れ  
寺の跡目の公事に骨折ル  
さみたれにひとの足駄の履にくき  
はやふ芝居の果し古市  
紫にうこんの絹を打かつき  
官位たべよと狐狂はす  
別殿を花の林に移し來て  
きさらき寒く遅き日を待

其二

白馬寺に如來うつして今朝の秋  
千草の花の露も甘ねき  
ひよとりの毛衣ふるふ月更て  
我ひとり乗舟を待けり

驕 董 董 驕 董 驕 董 驕 董

鐵 百 維

僧 池 駒

○たみてーだみ  
て。

○うつなふーろ  
つゝなう。

古郷の便うれしきとしの暮  
 屬にすゝむ烏帽子かりきぬ  
 朝日の空となり行山かつら  
 松よりたかき市の葉柳  
 盗人を女こゝろに追かけて  
 熱き病をふと忘たり  
 聲たみて仁王經を誦しぬらん  
 日毎の雨の中に氷降す  
 うたかたの阿波の小島に船破りて  
 堺の住居みとせふりぬる  
 商ひを夫婦かなかに仕覚えつ  
 髪をはらけるはるの宵月  
 風もなくてうつろふ花の薫來る  
 申の口の出入とのけき  
 さまぐのこゝを鸚鵡のいふ日哉  
 高麗人の碁や勝となるへき  
 うつゝなふ抱よせたる膝かしら

池駒僧池駒僧池駒僧池駒僧池駒僧也駒



○良一親。

○総一總。

起よ今朝桔梗の雫ふりかけむ 青  
 水無月のからきめを見て今朝の秋 江戸存  
 水底に青砥か錢やけさの秋 召  
 朝貝や星のわかれをあちら向か、千代  
 我屋根をはつれてゆかし天川 超  
 露ふけて淀に落るや天川 道  
 病起

櫛こしに鬼を咎うつ今朝の秋 燕  
 角力取の身をひそめてや魂迎 也  
 盆二日過て出来たる燈籠哉 一  
 彩ぬ切籠の総にあきの風 几  
 傾城に腕見せけり相撲取 松  
 市中

躍子や夕間くれして狂はしき 大  
 うかとお出て家路に遠き躍哉 召  
 細腰の法師すゝろに踊かな 燕  
 魂祭り八千代諷ひし一座也 舊  
 國

咲てうれし墓のほとりの草の花  
をみなへし雨にうたれて老にけり  
湖 菱 柳

由井の濱つたひして

朝露や浪やはらかに磯の艸  
紙屋川花野に橋をわたしけり  
穂に出て山田に交る薄かな  
落日の潜りて染る蕎麥の莖  
太 田 二 燕 貞 梅 祇 村

宮城野の野外武藏野に似たり

萩原やかたしの鎧こゝにあり  
雁鳴や御殿くの戸さし頃  
紀路にも下りす夜を行雁孤ッ  
雁 自 燕 村 笑 宕

旅中

川霧や馬打入るゝ水の音  
霧こめて道行先や馬の尻  
わかたはこ丹波の鮎の片荷哉  
衣うつ片手に酒の小賣かな  
城跡の一段高し蕎麥の花  
太 凡 董 祇 雅 石 喬 因

大名をとめて蘇鐵の月夜哉  
 田月や下戸の建たる藤引ん  
 江戸多少福

## 三井寺にて

院の古き硯やけふの月雁  
 名月や兎の糞のあからさま超  
 名月の明る朝日やいせの海百  
 今落す水に影さす月夜哉管  
 うらめしきまてに月澄夜明かな  
 櫓良鳥

## 良夜

名月や落るものとはおもはれす嵐  
 家賣た金なくなりぬ秋の暮鶴  
 合奥して傾城買ふやあきの夕  
 田合也  
 いつも来る乞食の聲や秋のくれ  
 春坡  
 春

## 老懷

去年より又淋しいそ秋の暮燕  
 雑炊に月の明りの榮花かな  
 へり青  
 野人皆もとりて後の月見かな  
 維駒  
 羅村

○まいらせん—ま  
ゐらせん。

○含—客。

飛 廠 の 影 や 凡 に 十 三 夜 成 文  
きりくす行燈にあり後の月二柳

いなりに詣る道のもと

稲の葉の青かりしよりかゝし哉 月 月  
月雪や花にもよらす鳥おとし 月  
拾ひあけて扇にはさむ落穂哉 月  
喰かゝり残すへからすとうからし 女 臥  
とうからしつれなき人にまいらせん 百 來 雨 池  
百 來 雨 池

雨中九日病起

試に下駄の高きにのほりけり 幾 鎮 僧  
鼻たれる朝のはしめやけふの菊 几 圭  
白菊やしつかに時のうつり行 花 江  
茄子引て菊に含のみゆる哉 高 砂 布  
柿紅葉遠く竹割ひゝきかな 佳 舟  
なからへて野分にあへる胡蝶哉 伏 水 鹿  
市小家に火ふせの札や秋の風 維 十  
夏を宗と造れは庵に野分哉 也 駒 有



○橘柑—蜜柑。

○外田—刈田。

## 遊仁和寺

君しるや花のはやしを紅葉狩  
 掃音も聞えて淋し夕もみち  
 白河も黒谷もみなもみちかな  
 谷紅葉夕日をわたる寺の犬  
 あなかちにくれなるならぬ紅葉哉  
 高雄山あはれにふかき紅葉かな  
 高雄山杉にうつれは日も寒し  
 探題を得て  
 曉瓦橋鳥嵐蓼几  
 臺全仙山山太董

撰出して淋しき色や青橘柑  
 酒になり餅に成稻の穂並哉  
 からく<sup>左</sup>と外田に残る鳴子かな  
 明ヶはまた夜寒の雨戸つくるはむ  
 稚子の二人親しき夜寒哉  
 雨風の日より<sup>和</sup>おさまる夜寒哉  
 園兩の襟かき合す夜寒かな  
 夜を寒み小冠者臥たり北枕  
 燕魚大旨召松  
 村官魯原波宗逸舌

○原本幼住菴に誤  
る

○かゝー加賀。

燕更を幼住菴にとめて

曉の寐すかた寒し九月慟  
暮の秋むま子ひゝ子俵積中に  
四五反のきぬ裁残す昏の秋  
行秋や蹴拔の塔を散木葉  
椎柴のはつれくやあきの霜  
故人にわかる  
維 麥 湖 臥 曉  
駒 水 岳 央 臺

木曾路行ていさとしよらん秋ひとり  
九月三十日須廣のうらつたひして  
燕 村

はるくと來てわかるゝや須廣の秋  
几 董  
古 寺 に 狂 言 會 や 九 月 盡  
雁 宕

閑居

小鍋買て冬の夜を待數寄心  
几 董

冬の部

鶯のしのひありきや夕しくれ  
太 祇  
初しくれ風もぬれすに通りけり  
千代尼

はつ時雨濡て淋しき羽織かな  
 ともかくも時雨次第の高雄哉  
 しくるゝや南に低き雲峰

## 茅簷

初多や空へ吹るゝ蜘蛛の糸  
 傘に相違あらさる十夜哉  
 我戀は婆になりたる十夜かな  
 門前の家は寐てゐる十夜かな  
 鹿喰へと人はいふ也多こもり  
 旅をすする春の思案や多籠  
 多籠燈光風の眼を射る

## 負郭

四ッ谷から馬糞のつゝく枯野哉  
 又或日扇遣ひゆくかれ野かな  
 多されや北の家陰の韭を刈  
 落葉かき若きも老と見られけり  
 茶の花や隠者かむかし女形

琴堂  
 歸厚  
 几董

召波  
 素文  
 蓼太  
 月居  
 道立  
 正巴  
 燕村

青峨  
 曉臺  
 燕村  
 雪居  
 鐵僧

○うち破ーうちも  
破。

黄昏や花落かゝる茶の木はら 維 駒

水落石出

冬川にむさきもの啄ム鳥かな 几 董

降ものに數ある冬の日より哉 渡 牛

こからしや後口の山も遠からす 社 燕

石 蔭の葉をうち破らぬ霰哉 熊 三

小坂殿のはり繩朽てあられかな 鶴 汀

一雫ましるかぬ鷹のけしき哉 也 好

初 霜や茶碗を握る 掌 仙 秋

法隆寺

もろこしの鐘も聞えぬ霜の夜半 蝶 夢

鐘氷る俊恵か寺の寐覺哉 白 石 乙

道連に別れて浦のちとり哉 伊 丹 東

四五羽立てたちもとりけり洲の衛 道 立

闇を鳴く沖のちとりや飛ふは星 几 董

さよちとり加茂川越る貸蒲團 無 腸

宵の間は虱もなくて古蒲團 百 池

○かゝー加賀。  
○見へー見え。

うつみ火を無下に乞るゝ隣かな  
我  
撫る手も一葉に似たり桐火桶  
心  
頭

尼になりし時

髪をゆふ手の隙明て亘燧哉  
千代尼

山もとの里と申てこたつかな  
風  
律

冬の日やとけては氷る忘れ水  
浪花一  
鼠

凍やしぬ人轉ひつる夜の音  
伏水驚  
喬

馬蹄今さりととは雪の酒屋哉  
成  
文

雪まろけ大きなものに成にけり  
甫  
尺

はつゆきや大名通る四ッさかり  
越前梨  
一

ところ／＼雪の中より夕けふり  
關  
更

したゝかに炭こほしけり雪の上  
銀  
鞠

憤人としらてまいらす雪の宿  
之  
仙

雪の戸に立かけて置箒かな  
かゝ佛  
仙

はつ雪にしろしのさは立しかとそことも見へぬこ

しのしら山

初雪のしるしのさはや艸の莖  
几  
螢

○菱氏本義。七部  
木義とあり、こ  
ゝは七部本に従  
はん。  
○瓦一筑。

いさ雪見カタナツクリ容す簑と笠燕村

古枝を鴉喰折歟雪のくれ其成

凍る夜や地より蹴放す馬仙台似大魯

とし火に氷れる筆を焦しけり

古硯銘  
鈍きもの先氷るなる硯かな  
几董

王義之  
物書て鴨にかへけり夜の雪笹山古貢堂

かさゝきや葱洗ふ川を踏わたる  
水鳥の水にしたしき古江哉暮蓼

水の面に入日残りて鴛の聲  
春香

鴨うちに城下出るや小殿原  
魚赤

羽をほすや小島の松にはなれ鴛  
斗文

古丘

水仙に狐遊ふや宵月夜燕村

寒月にすまひか宿の稽古哉大石守子曳

病る身の蒲團を替る小春哉

明

○こたちー木た  
ち。  
○つきんーづき  
ん。

○聞てー聞は。

○伎。

雪中

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|---|---|
| ゆ | 家 | 年 | 臘 | と | 行 | 争 | 朔 | ゆ | し | 寐 | 旅 | つ  | 辻  | 門 | 南 |
| き | 中 | わ | 八 | し | と | は | こ | く | の | て | 人 | き  | 君  | 見 | 宗 |
| ゝ | 衆 | す | や | く | し | て | か | 年 | ゝ | 聞 | に | て  | え  | の | の |
| せ | の | れ | 和 | や | や | 行 | す | の | め | て | 銭 | 爪  | て  | 貧 | の |
| て | 忍 | 昔 | 尙 | 二 | 又 | 來 | 若 | 女 | や | 西 | も | 上  | 爪  | し | の |
| 年 | ひ | 念 | 漸 | 人 | 訪 | ふ | 衆 | 歌 | 水 | へ | ら | り  | 上  | き | の |
| く | く | 者 | く | の | ふ | 年 | の | 舞 | に | 過 | ひ | なり | なり | 寺 | の |
| る | や | と | ね | 親 | 家 | そ | め | 妓 | け | け | け | 多  | 寺  | や | の |
| ゝ | と | 若 | ひ | の | も | 牛 | や | や | り | り | 鉢 | こ  | 多  | 多 | の |
| 雪 | し | 衆 | ま | 煤 | す | 拂 | 年 | 夜 | ふ | は | た | た  | ち  | 木 | の |
| の | 忘 | か | さ | こ | ゝ | 信 | の | の | る | ち | ゝ | ち  | ち  | た | の |
| 山 | し | な | り | も | 信 | 州 | 昏 | 梅 | 雪 | 叩 | き | き  | き  | た | の |
| 家 | 忘 | な | り | り | 州 | 米 | の | の | 士 | 佳 | 佳 | 藏  | 舊  | 仙 | の |
| 哉 | 忘 | な | り | り | 米 | 居 | 太 | 太 | 守 | 川 | 棠 | 宮  | 魯  | 月 | の |
| 通 | 忘 | な | り | り | 居 | 居 | 梁 | 梁 | 佳 | 則 | 景 | 路  | 魯  | 溪 | の |
| 助 | 忘 | な | り | り | 居 | 居 | 祇 | 祇 | 士 | 川 | 棠 | 路  | 魯  | 溪 | の |
| 波 | 忘 | な | り | り | 居 | 居 | 祇 | 祇 | 士 | 川 | 棠 | 路  | 魯  | 溪 | の |
| 助 | 忘 | な | り | り | 居 | 居 | 祇 | 祇 | 士 | 川 | 棠 | 路  | 魯  | 溪 | の |

○作者名ナシ。

除夜遊青樓

年かくすやりてか豆を奪ひけり  
なつかしき月の栖や大三十日

移几  
竹萱

脇起俳諧 冬

冬こもり五車の反古のあるし哉  
ひとりと寒夜に鎮うつ月  
郊外何焚やらん煙して  
流のすゑの水はふたすち  
枝伐て一のまふしを定むらし  
甥の太郎か先口を利  
新宅の夏を住よきはしら組  
水うちそよく進物の鯛  
裂やすきいとのみたれの古袴  
妻を奪ひ行夜半の暗きに  
ちらくと雪降竹の伏見道  
小荷歌返して馬嘶ふらん

我道之正春也百燕臥鎮維  
則立兮巴坡好池村央僧駒



○也なり。

なくくも棺を出す暮の月  
 よからぬ酒に胸を病む秋  
 小商ひ露のいく野の旅なれや  
 燕来る日の長閑也けり  
 反古ならぬ五車の主よ花の時  
 はるやむかしの山吹の庵  
 田几湖湖佳自  
 福董岳柳棠笑

右一巡捻香

鏡とらはふたつの鬢や枯尾花と父か病中の吟を見て  
 往事をおもふ

父か世にかはらぬ色や枯をはな  
 維  
 駒

## ○弦絃。

## ○牌陳。

長和治安のむかし、關白道長公法成寺の御堂つくらせ給ひしに、國々の受領より、竹木瓦石の類ひ舟車に積て持運ひつゝ、金銀珠玉の七寶をもて、玉の臺調ひしかは、千萬の僧威儀具足して、梵音錫杖の聲を唱て讃を誦し、舞人樂人糸竹管弦の曲を盡し、種／＼の名香天に薫し、花ふり風やはらかに、草木すら皆のりをとくと聞ゆ、かゝる供養の結構は、むかしも今もためしなきめてたき事にいひあへりとかや、爰に此編は古春泥居士の遺訓を追ふて、息維駒志願を發し、國／＼の俳諧者流の句を拾ひ、居士か舊識知音の吟をあつめ、或は當時の詞友に句を乞なとして、かの良材金石をもて一集を供養せんとなり、予みづから筆を採て此行に微力を添、撰成てこれを先人の眼前に供す、その功德見佛聞法の結縁なるへし、且、太祇移竹嵐山の徒をはしめ、數輩の古人、再集中に出現して風月花鳥の吟を諷誦す、さは是自他平等の追善おほかたならぬ利益ならずや。

天明三卯歲十一月

春夜樓晋明書

庫文綾特  
75-173

昭和三年一月十日印刷  
昭和三年一月十五日發行

發行所



東京市神田區  
南神保町十六番地

岩波書店

電話九段二一〇九番  
振替東京二六二四番

印刷者

島連太郎

發行者

岩波茂雄

校訂者

伊藤松宇

東京市神田區南神保町十六番地

東京市神田區美土代町二丁目一番地

蕪村七部集 ★★

定價四十錢

三秀會印刷

## 讀書子に寄す

岩波茂雄

岩波文庫發刊に際して

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫はこの要求に應じそれに勵まされて生れた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に限なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。其廣告宣傳の狂態は姑く措くも、後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を壟縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の良途なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の實務の愈重大なるを思ひ、從來の方針

の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價值ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んでこの學に参加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒としてその達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

岩波文庫

〔此文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。〕

□内容の厳選 古今東西のあらゆる古典及び、価値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。

□最低の廉價　出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、澤山の内容を盛る形式を採りました。

「**購求の自由**」 しかも讀者が全く自由  
に、欲しい本を隨時求められる自由  
選擇の方法を執りました。

□方法は、範を廣く内外に覓めたる結果、最合理的普及版たる獨のレクラムに則りました。

□約百頁を單位として星一つを以てそ

れを現はし、★一つ毎に二十銭の定  
價です。

□★一つをIに數へて此の文庫の番號を進めてゆきます。

□番號はたゞ發行順に従つて之を追ふ  
ものであります。

□☆☆或は☆☆☆☆は、夫々二百頁  
或は五百頁の本一冊なる事を示し、

百頁つゝの分冊ではありません。

□装幀は平福百穂畫伯を煩はしました

□送料(及定價)は左表の通りです。

★  
定價二十錢送料二錢

★ ★ 四十錢 四錢

★★★ 六十錢 四錢

★ ★ ★ ★

八十錢

六錢

★ ★ ★ ★ ★  
一四六

□御注文は前金で御願ひ致します。

- 1—4 新萬葉集上巻 佐佐木 信綱編 ★★★
- 5—7 新萬葉集下巻 佐佐木 信綱編 ★★★
- 8—9 こゝろ 夏目 漱石著 ★★
- 10 ブソクヲテスの癡痴入保 阿部 次郎譯 ★
- 11—12 実践理性批判 波多野 精一譯 ★★
- 13 古 事 記 幸田 成友校訂 ★
- 14—15 藤村詩抄 島崎 藤村自選 ★★
- 16—20 國富論上巻 氣賀 劭爾譯 ★★
- 21—31 國富論下巻 中巻 國富論 下巻 國富論 下巻 (未刊)
- 32 にてくくら べえ 樋口 一葉著 ★

- 33 國性總合 戰近松門左衛門作 ★
- 34—35 戦争と平和第一巻 トルス トイ作 ★★
- 36—41 戦争と平和第二巻 トルス トイ作 ★★
- 42—44 戦争と平和第三巻 トルス トイ作 ★★
- 45—55 戦争と平和第四巻 トルス トイ作 ★★
- 56—58 芭蕉七部集 伊藤松字校訂 ★★
- 59 五 重 塔 幸田 露伴著 ★
- 60—61 病牀六尺 正岡 子規著 ★★
- 62 父 ストリントベルク作 小宮 豊隆譯 ★
- 63—64 出家とその弟子 食田 百三著 ★★

- 65 櫻の園 チエーホフ作  
米川正夫譯 ★
- 61-67 幸福者 武者小路實篤著 ★★
- 63 號外 他六篇 國木田獨步著 ★
- 69-70 科學の價值 ホアンカレ著  
田邊元譯 ★★
- 71-73 認識の對象 リツケルト著  
山内得立譯 ★★
- 74 我らが春 春一茶  
集萩原正泉本校訂 ★
- 75-76 北村透谷集 島崎藤村編 ★★
- 77-78 賢者ナータン レツシング作  
大庭米治譯 ★★
- 79 春の目ざめ ゲエデキント作  
野上夏一譯 ★
- 80 令嬢ユリエ ストリントベルの作  
茅野鷹野譯 ★

- 81 我々の心 山中天の郎  
山近松門左衛門作  
和田萬吉本校訂 ★
- 82 闇の力 トルストイ作  
米川正夫譯 ★
- 83-84 仰臥漫錄 正岡子規著 ★★
- 85-87 科學と方法 ホアンカレ著  
吉田洋一譯 ★★
- 88 伯父ワーニヤ チエーホフ作  
米川正夫譯 ★
- 89 生ける屍 トルストイ作  
米川正夫譯 ★
- 90 賃労働と資本 マルクス著  
河上肇譯 ★
- 91-92 チェールズ・ダーウキン ダーウキン著  
小泉丹陽譯 ★★
- 93 俗樂旋律考 上原六四郎著 ★
- 94 好色一代男 西田萬吉本校訂 ★



- 95 一風 山口 御幸田 錦作著★
- 96 17 カンプロレゴメナ 桑木 眞祐 著★
- 98 99 上田 敏詩抄 茅野 野々彌 著★
- 100 奥の細道 その他 伊藤 忠雄 著★
- 101 うたかたの記憶三篇 森 田 外著★
- 102 103 綱島 梁川集 安倍 能成 著★
- 104 106 小 公 子 バアネツト 著★
- 106 109 希臘羅馬神話 バルフィンチ 著★
- 110 好色 五人女 和田 萬吉 校訂★
- 111 113 ゲエテとの對話抄 エツケルマン 著★

- 114 千曲川のスケッチ 島崎 藤村 著★
- 115 プラプロタゴラス 菊池 登一郎 著★
- 116 愛と死との戯れ 片山 敏彦 著★
- 117 布施太子の入山 倉田 百三 著★
- 118 埋 木 水沫集より 森 田 外著★
- 119 120 オネーギン プーシキン 著★
- 121 好色 一代女 和田 萬吉 校訂★
- 122 125 ギルヘルム・マイスター(上) 林 久 男 作★
- 123 128 ギルヘルム・マイスター(下) 田 刊 (未刊)
- 129 130 民 約 論 ルソ 著★

131 マルクス 資本論(一) 宮川上 實録 ★

132 マルクス 資本論(二) 宮川上 實録 ★

133-138 マルクス 資本論 續刊 (未刊)

160-170 古今和歌集 尾上八郎校訂 ★★

171 花 傳 書 野上聖一郎校訂 ★

172-174 スピノザ 哲學體系 小尾 範治譯 ★★

175-176 蕪村七部集 伊藤 松学校訂 ★★

177-180 法の精神 上巻 モンテスキエ著 宮澤 俊輔譯 ★★

181-184 法の精神 中巻 (近刊)

185-188 カラマーゾフの兄弟(一) ドストエフスキー作 米川 正夫譯 ★★

189-191 カラマーゾフの兄弟(二) ドストエフスキー作 米川 正夫譯 ★★

192-199 カラマーゾフの兄弟(三) (近刊)

200 日本書紀 上巻 黒板 勝雄編 ★

231-233 日本書紀 中巻 下巻 (近刊)

210-211 若いゾルテルの悩み ゲヨエテ著 茅野 喬々譯 ★★

212 勞賃價格と利潤 マルクス著 藤澤 ★

213 日本永代藏 和田 鶴作 ★

214 稲 妻 ストリントベル作 小宮 豊隆譯 ★

215 青銅の基督 長興 哲郎著 ★

216-217 水の 上 モウパッサン作 吉江 富松譯 ★★

- 218—219 經濟要錄 佐藤信淵著 ★★
- 220—221 和歌・或る男其姉の死志賀直哉著 ★★
- 212 幽靈曲 ストリーントヘル作 ★
- 223—224 墨汁一滴 正岡子規著 ★★
- 225—223 恐ろしき媒 ホセ・マテアグライ作 永田寛定譯 ★★
- 227 作り上げた利害 ベナベンテ作 永田寛定譯 ★
- 228 子守唄 シェルラ作 永田寛定譯 ★
- 223 人間萬歳 武者小路實篤著 ★
- 230—231 オスカー 藝術經濟論 西本正美編 ★★
- 232 世間胸算用 和田純吉校訂 ★

- 233 自然認識の境界 デュボアス・レモン著 宇治の七つの謎坂口徳男譯 ★
- 234 陸奥直次郎 長興善郎著 ★
- 235—237 福澤選集 福澤諭吉著 ★★
- 238 二人女房 尾崎紅葉著 ★
- 續刊書目
- カント純粹理性批判 上巻 天野貞祐譯
- マッシュペル 宗教論 石原謙譯
- パンアルイマス エルカント 河東清輝
- 學者と文人 ポアンカレ著 平林初之輔譯
- 形而上學序論 ベルグソン著 錦田義富譯

ニイテ この人を見よ 安倍 龍成譯

パ ン セ ー 落合 太 郎譯

エ ツ セ ー 落合 太 郎譯

將來の哲學の根本命題 植村 晋六譯

哲學改革への提言 植村 晋六譯

勞 働 者 綱 領 小泉 信三譯

經 濟 原 論 小泉 信三譯

地 代 論 山口 正 吾譯

マルクス ドイツチエ・イデオロギー 三 木 清譯

ルツ・エ・ミ ー ル 平林 初之輔譯

ベール 婦 人 論 牧山 正 彦譯

世 界 の 生 成 アレニウス譯

種 の 起 原 小泉 信三譯

雜種植物の遺傳 小泉 信三譯

生命の不可思議 後藤 裕太譯

相互扶助論 近 三 四二郎譯

神 皇 正 統 記 星野 日 子西郎板

源 氏 物 語 紫 式部作

平 家 物 語 島津 久 英校訂

參考 伊 勢 物 語 尾 代 弘賢校訂

榮華物語 語川上多助校訂

和漢朗詠集 山田孝雄編

金槐集 豐藤茂吉校訂

忠兵衛  
梅川冥途の飛脚 虎松門左衛門作  
和田萬吉校訂

博多小女郎波枕 近松門左衛門作

西鶴織留 豊田萬吉校訂

彌奇翁俠客傳 和田萬吉校訂

椿説弓張月 馬華作

近世説美少年錄 馬華作

小説浮牡丹 山東京傳作  
和田萬吉校訂

本朝醉菩提 山東京傳作

浮世風呂 式亭三馬作  
和田萬吉校訂

浮世床 式亭三馬作  
和田萬吉校訂

謠曲集 野上豊一郎編

舞の曲 本野上豊一郎編

申樂談義 世阿彌景春  
野上豊一郎編

竹の里歌 正岡子規著

子規俳句集 正岡子規著

道草 夏目漱石著

十三夜 その他  
樋口一葉著

その 妹 武者小路實篤著

志賀直哉短篇小説集 志賀直哉著

中野道遙集 菅川臨風編

左千夫歌集 土屋茂吉編

啄木歌抄 若山牧水編

陶淵明詩集(附漢花集) 幸田露伴校閱  
藤山四郎註

佛蘭西文學史敍説 フリレンヂエ著  
關根秀雄譯

ヘルマンとドロテア 佐藤通次譯

マノンレスコー プレボア著  
河盛好藏譯

檢察官 米川正夫譯

三人姉妹 米川正夫譯

白鳥のうた 米川正夫譯

路上 米川正夫譯

現代の英雄 中村白雲譯

死刑囚の最後の日 ユーゴー著  
豊島與志雄譯

痴人の告白 ストリントベル著  
和辻・林共譯

エビクロスの園 アントール・ワンス著  
林達夫譯

ドン・キホーテ ゼルヴァン著  
水田寛定譯

ラム沙翁物語 野上彌生子譯

ハル樂園喪失 藤井 尚譯

